

わが人生の

あ

し

あ

と

歴史街道スルーハイク遊学紀行

— ステージ 1 —

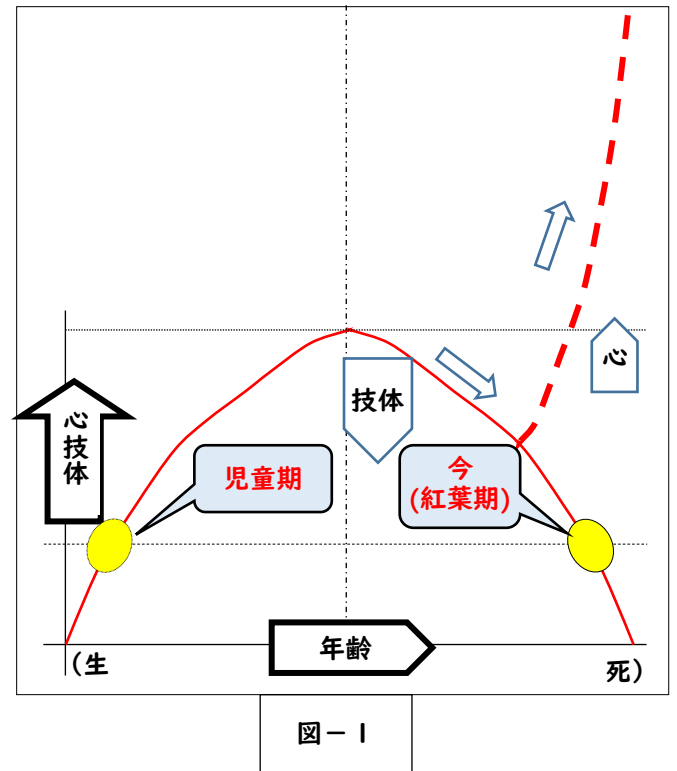
(7,000kmの連日連泊歩き旅)

以下は、私の人生における「大沼固有種バラマキ作戦」の1ページです。

1. 吾が紅葉期人生の自覚

還暦の60歳頃を迎えた頃です、世の平均寿命・健康寿命と吾が余命の事が気になって来ました。周りの同年代の人から聞いても自然にそのような気持ちになるようです。2008(平成20)年時点の日本人の平均寿命は女性86.05歳、男性79.29歳との事ですから、例えば今60歳だとすれば、女性で25年ちょっと、男性で20年ほどの余命であります。それよりも「健康寿命」の方が大事です。今になって如何に生きるべきか、寿命の後ろから数えた方が手っ取り早い感じになりました。私の亡き両親や親族を見て来るとそのような実感がします。こんな事を思う時に浮かんで来るのが図一1のイメージです。「吾が人生放物曲線」と名付けています。

人は生まれて、年齢と共に心技体が成長・充実して行くが、ある所でピークを迎えつつ成熟の域を抜けるようにそれ以降は、加齢と共に下降線を辿り、老衰の域からやがては人生の終着駅に到達し死を迎える事になります。云われているように、ピークまでの「登山域」とそれ以降の「下山域」の2段階、あるいは3段階の「生→旺→墓」、あるいは4段階の「青春・しゅか朱夏・はくしゅう白秋・げんとう玄冬」、または「がくしょうき学生期(0~24歳)・かじゅうき家住期(25~49歳)・りんじゅうき林住期(50~74歳)・ゆうぎょうき遊行期(75~90歳)」に置き換えることも出来ます。天皇陛下も総理大臣も皆このように辿ります。



私は、還暦前後から、技体は衰えて行く(来る)が、心は幽離し孤独の世界に飛び込んで行くようで、しかし、そこは寂しいところではなく、自由満喫の優美な世界が広がっているという感じになりつつあります。

今の私は、児童・幼児期の私とイコールなのです。吾が子供の頃を思い出し、さらに孫の幼児期のはしゃぎぶりを見ると、今の私は幼児的言動に酷似しています、偶には軽挙妄動もあります。それは、いわゆる「幼児返り」そのものです。今の私に相当する児童・幼児期とは3歳~5・6歳くらいです。幼児期レベルの無邪気な好奇心と懐疑心の発達過程を感じます。ただ、今の私が児童・幼児期と違うのは、幾ばくかの経験を積んで来た事から、物事の本質に迫りたいとする心は、少しは練れて来たような気はしています。「先々そうは長くない人生」と言う残余の命の到来を意識するようになって来ます。

加賀山耕一さんはその著書「お遍路入門(ちくま新書)」で「・・・人生をそう簡単にリセット出来ないし、ご破算で願ひましては、と言うような仕切り直しにならないことは、・・・」とおっしゃられていますが、元々、「過去の成功体験は今の自分に意味をなさない(反省はその都度解決済にすべき)」と言うのが、吾が人生哲学であり、まったく同感です。何だかんだ言っても過去は戻りません。過去の成功体験・出世体験に拘泥し得意げに自慢して語る人(今、出来ない人の自分逃避の言い訳)の話には実は「馬

耳東風」(目は聞いているが、心は聞いていない、よって何も残らない、時間の無駄で終わった!)の姿勢です。

夜寝る時、ベッドに横になって睡魔に吸い込まれるまでの間、頭に浮かんで来るのは、次のどちらだろうか。「今日の出来事(体験の過去)を思い起こして振り返る事」、または「明日以降(未経験の未来)の予定を思い巡らす事」。前者は女性に多く後者は男性に多いと何かの本に書かれていた気がします。私は、前者は0.1、後者99.9の割合、つまり、殆ど全部は明日以降の計画、段取り、夢の設計などの事が頭を占めます。もちろん男性でも前者で一杯と言う人がいるかとは思いますが。

このように思いを巡らしている中で、還暦を過ぎたこの歳に相応しい「探究心(物事の真相・本質を探りたいとする向上心)」が自噴(直感力・洞察力・思索力の内発)し、すると別の処で右往左往していた「好奇心(未体験・未知の事物に対する強い関心欲)」が活動的になり、そしてその思いを実行・実現したいと言う「冒険心」――すなわち「知行合一」の行動欲、いわば探究心と好奇心の統合に駆られる心の蠢きに従順になりたいと強く念ずるようになりました。もう歳だから、などと弱音を吐く 萎縮的な防衛本能は脇に追いやられるような境地になったのです。この三つの心を「我が儘三心、強がり三心、足掻き三心、ぶつぶつ三心」などと称しています。

こんな心情を自覚する中で、ふと、対話を求めて何やら囁いて来るものを感じたのです。それは神仏からの囁きだと直感しました。神仏との相互アクセス期の到来です。神仏と私の共時性と共鳴が生まれたのです。偉大なる理想精神への憧憬心です。これは人間の性であると思います。

そのように思う中で、図-1において加齢衰退域の上をなぞり、確実に下降している吾が人生に満足し納得のゆく楽しいものにしたいたいと強く意識しています。肉体的な減衰は諦めるとしても、反面、心はむしろ造化(進歩向上)、止まない内発力を新鮮に感知するようになりました。過去を踏まえるのは由としても、「今何をするのか・何をしているのか、今後何をしたいのか、今後何をするのか、その夢は!」が私の最大の関心事です。「夢」はすなわち現実的な、物質的な物事に対する獲得意欲ではなく、精神的な側面からの「理想」と言う事になります。理想なくして進歩はない、進歩のある処には必ずや理想が生まれます。理想を高めれば実現への発陽心が鼓舞され進歩を伴います。このような連動は、人間に生まれながらしての**備悉精神**だと思えます。日常の世俗的な生活の悪弊の慣習に、夢と理想を入れ込み掻き混ぜて清浄化し、心の新陳代謝を図る活動の渴望を自覚出来ます。

妻の知人の話です。「死ぬ時、『あれも出来なかった、これも出来なかった、あれもしたかった、これもしたかった』と嘆くのではなく、無念を残すのではなく、『あれも出来た、これも出来た、思いの通り全てが出来た、満足・満足・大満足』と言う思いで逝きたい」と、まったく同感です。私もそのように大満足であの世に逝きたい!

インターネットのある教育サイトにあるとおりの「40万個もの卵子の一つと4億個の精子の一つが巡り会って、一つの命が生まれる。」と言う奇跡に近い確率で生まれた命が今日の私なのです。例えば、10代遡れば2の10乗で1,024人、50代遡れば $0.1125899906842624 \times 10^{16}$ の16乗(0.1...)京人です。1代の間隔を平均20年と見ますと $20(\text{年/代}) \times 50(\text{代}) = 1,000$ 年です。逆の言い方をすれば、過去1千年を見ただけでも50代0.1京人の命のリレー・バトンタッチで受け継がれて来た結果としての今の自分です。親を遡って行くと2の累乗の人が関係した、2の二乗で無限に向って増えて行く事になります。無限の行き先には「**神漏岐命・神漏美命**」の祖(親)神様に辿り着きます。一度限り・一回限りの命です。一生涯の80年は長い様で短いものです。悠久の彼方の原始の時代から現在に至り、永久の未来へと繋がる時間軸の中では80年は極々短いものです。したがって、今からの余生は短くもとても貴重な時間です。組織や他人から束縛されたくないと思えるようになりました。そのような気持ちに率直に向

き合いたいと強く決意するようになりました。何かの物質的・金銭的な対価や地位・名誉を期待した義務感ではありません。自然な心の疼うずきです。

図一「吾が人生放物曲線」から、森羅万象の生涯は、『生・旺・墓』せい おう ぼを辿たどる、という言葉思い出しました。何事も、『生まれる=生』ことの始まりがあり、次第に『壮んに（盛ん）=旺』さかになり、やがては衰退から『死=墓』ぼに至り終わってしまう。一つだけに見ればそれで完結となるが、物事の連関性・鎖交性の視点からは、あるいは、一切の存在は他との関係が縁となって生起するという縁起の視点からは、何事も始まらなければ壮んにならず、壮んになることなくして終わりはなく、終わりがなくしては始まらない。個体は『生・旺・墓』せい おう ぼで完結しても、宇宙の係りでは、一方に死滅があれば、他方は生起し、こうして無限に輪廻転生の流れがあります。栄枯盛衰は人工的に左右されない宇宙の掟であり、いくら立派なことを述べても、きちんと死ぬのです。個体（私が、貴方が）が死滅したからといって、地球・宇宙は滅びません。回顧すれば会社現役時代には、一時期、俺がこの担当を外れると、この部署はどうなるのだろうか、などと奢った風になり、息巻いたこともあったが、後には、まったくの無意味であることが分かったものであります。

あちこちに飛びましたが戻って、このような崇高な命の尊厳に感謝し、命を大切に、楽しく、今の命の疼うずく儘に残余の人生を歩みたいと思っています。

2. 歩く事

そこで、具体的にどうするのかとなります。定年退職後の60歳以降は24時間365日、毎日が休暇の万年休日・毎日が休日・休暇です。これをどのように意義あるものにするか、直感「歩あき旅」でした。逃れられない五濁悪世ごじよくあくせに揉まれながらも勝手気ままな喜怒哀楽の心を整理したく「歩あき旅の修行道」に挑んで生きたいと念じたのです。「歩あき旅すなわち歩く事」となると、意識的に、健康維持とか、体力増進とかそんな言葉を出したくなりますが、私には直接にはそのような意図はありません。歩あきにはとても良い現象を自覚出来ます。のうみその創造力が活性化されて種々雑多、千差万別のあれこれのアイデアが浮かんで来ます、噴出する勢いを感じます、私のボケ防止に最適です。何かを熟慮する時、私の場合は、沈黙考と言うようなデスクの上で考えふけに耽る事は出来ません。むしろ、立ったてうろうろする、体を動かしながらの姿勢である方が、考えがより深まります。この行動は未熟な児童・幼児期の精神状態を引き摺っているそのものです。

私は、家の中・屋内で時間を費やす趣味（囲碁・将棋・麻雀、書道等の文化・芸術の養成講座や屋内スポーツ等）は持っていません。屋根の下でじっと過ごす事は出来ぬ性格です。楽しみとなれば、従来は、若い頃に友人から勧められて始めた登山を休日にやっていたましたが、この歳になり、加えて、自然と歴史に関心が高まりました。この登山の延長線として「歴史街道歩あき旅」が浮かんだのです。赤子の心から発する児童・幼児返りの好奇心と紅葉期ロマンの発露の合体に伴う放漫歩行旅です。見知らぬ所に行って、初めてのものを見たいと言う廻国遊行願望に着火したのです。

その姿・やり方は、ザックを背負い、ダブルストックで漕ぐ長距離ノルディック・ウォーキング・スタイルです。いずれにしても「せつない・苦しい」行いです。しかし、まだまだ、青臭い鼻垂れ小僧の未熟者がすべき修行道だと思ひ歩あきます。苦しくなると『懺悔懺悔六根清浄』さんげさんげろっこんしょうじょう『慙愧懺悔六根罪障』ざんきざんげろっこんざいしょうと唱えつつ、ぶつぶつ言いながら歩あきます。人間では如何ともし難い自然の風雨寒暑に身を投じ、あれもこれも欲望を整理したいとの思いもあります。心の戦場で「積年の垢落し」をするのです。つまり、「心の洗か浄」です。戦か場で洗か浄のぼするのです。洗か浄する事からのうみそが活性化されます。多様なアイディ

アが吹き挙げて来ます。何かをしたいという意欲がふつふつと湧き上がって来ます。

歩く事の直接的な目的は上記のとおり「心の洗浄」という抽象的・漠然としたものであるが、敢えて、具体的に歩く事の目的、意義付けをするのなら「修行道」は「巡礼行」——特定の宗教の聖地を巡ると言う狭義の解釈ではなく、偶像崇拜に毒されるということではなく、広く神社・仏閣（社寺）を訪れ、古道・旧街道を尋ね、歴史・史跡に触れて、新たな人と出会い、自らを省みるための行い、体験を通して温故知新を学ぶ旅——の実践でもあります。そして「井の中の蛙」殻破りの「もがき」でもあります。

いずれにしてもそもそも知らない土地に行ってみたいのであれば、その移動手段としては、汽車・バス等の公共交通機関、団体ツアー旅行、自家用車、バイク、自転車などの利用があります。中でも手軽なのは自家用車利用です。日常生活は車を使う機会が多く、日常の行動範囲外に出かける場合は、カーナビを装着する機会が多くなります。私も人並みにカーナビを使っており、私の知らない土地でもカーナビは目的地にちゃんと連れて行ってくれます。しかし、後で振り返って見ると、そこまで行く過程の状況は殆んど記憶に残りません。車移動の場合はカーナビを使わずともそうですが。その点、「歩き」は違います。後日写真（全てパソコンに保存し、原則、印刷はしません。）や関連資料を見ると、その場所とその前後の情景が殆ど思い出されます。歩くスピードは自分の思考回路、記憶装置のスピードと波長・間合いが同調し、同期が上手く取れるのではないかと思っています。車のスピードと私の脳の回転では、車の回転が速過ぎ、つまり私の脳の働きが鈍っており、合わないと言う事です。

「歩き旅は人生修行道場のステージ」であると決めています。そのステージで学ぶ事・養う事は「思考の三原則」と「知行合一」の二つであります。前者・この言葉は、私が私淑する安岡正篤先生まさひろが様々な書籍で説かれて来た「長期的視点・多面的視点・根本的視点」であります。後者・この言葉は陽明学の学問を大成した王陽明が唱えた「知は行の始め、行は知の成るなり。知行は分かちて両事となすべからず。

（「知る事は行の始まりであり、行の事は知る事の完成である。知る事と行の事を別個のものとは見做さない。」）です。私流に解釈すれば、「知りて行わざれば、知った事に能わず」と断言しています。

限られた余生の中で、多くの所に行き、沢山の情景を見て置きたいと言うのであれば、飛行機に乗り、電車を繋ぎ、車で回った方が、あるいは自家用車で移動した方がすごく効率的です。しかし、私は、足が丈夫なうちは、ご先祖・両親から頂戴したこの2本足で歩いて楽しみたいと思っています。

歩き旅は、確たる意義付けや明確な理由もなく、心の赴く儘にただ歩きたいだけです。残りの吾が人生全てを「ゴーイング・マイペース」！！

3. 本件の位置付け

ところで、本件の位置付けについて、図(表)－2に基づき触れて置きます。私の人生を本表のように区分し、文書にした人生記録（人生報告書）を残しています。誕生から高校までを「人生 Kプロジェクトーラウンド I」、高校卒・入社から退職までの現役時代を「同ーラウンド II」とし、退職以降を「同ラウンド III～」と区分付けをし、その上で同ラウンド III以降に「リプレース」の言葉を付加しました。なお、↷は文書編集改行記号ですが、その意味合いは、私のこれまでの人生に節を入れる事です。人生の改造・更新・再築・再興との思いを込めて付け加えたのです。

退職翌年以降の「歴史街道歩き旅」に係る記録を「歴史街道スルーハイック遊学紀行」と呼称付けをしたが、退職翌年からの5年間の同紀行を「**ステージ I**」とし、この期間に踏破・完か（貫ん）歩ぽしたスルーハイック（基点から基点まで一気通貫の連続連日連泊で歩き通す旅）・ロングトレイル（長い距離の歩き旅）の行動結果と、これに係る思い出、状況を記録・整理したのが本書です。これは私の細さやかな遊び心です。

人生区分 (期間) の位置付け タイトル	人生 Kプロジェクト				
	ラウンドⅠ	ラウンドⅡ	リプレイス		
			ラウンドⅢ	ラウンドⅣ	ラウンドⅤ
人生報告書 名称付け メインタイ トル	吾がふるさと	サラリーマン 現役時代	歴史街道スルーハイク遊学紀行 [定年退職以降]		
			ステージⅠ	ステージⅡ	ステージⅢ
西暦年間	1949年 ～ 1968年	1968年 ～ 2009年	2010年 ～ 2014年末	2015年 ～ 2019年末	2020年 ～ 2024年末
和暦年間	昭和24年 ～ 昭和43年	昭和43年 ～ 平成21年12月	平成22年 ～ 平成26年末	平成27年 ～ 平成31年末	平成32年 ～ 平成36年末
年齢	0～ 18歳	19歳～ 60歳(退職)	61歳～ 65歳	66歳～ 70歳	71歳～ 75歳
備考	誕生から 高校卒まで	高卒・入社から 退職年まで	退職翌年から 5年間	左記その後の 5年間	左記その後の 5年間

図(表) - 2

全体構成（目次）

大項目	題目（件名）	図(表)の 通番号	頁の通番号
[上]	はじめに	----	1～5
	目次	(本書)	6～7
	第一部	プロローグ	3～5
	第二部	希望計画ルートの検討	6～9
	第三部	前行程の楽しみ～ [大香 ^{だいこう} ブランド ^{RouCon} 老魂サブタイトル] の設定	10～11
	第四部	スルーハイクに臨む4原則	12
	第五部	希望計画ルートの電子化	13～14
	第六部	必携「七つのデジタル武器（七つ道具）」	15～21
	第七部	電子ルートの実践活用	22～27
	第八部	中行程（歩きの ^{さなか} 最中）の楽しみ	28～34
第九部	後行程（帰宅後）の楽しみ	----	40
[中]	表紙		
	第一章 2010（平成22）年		
	第1節 「番外編——旧塩の道（秋葉古道）」	1～2	1～3
	第2節 「旧山宮街道 ^{やまみや} 」	3～4	4～8
	第3節 「大峰奥駈道 ^{おおみねおくがけみち} 」	5～8	9～15
	第4節 「旧下田街道（+箱根神山）」	9～14	16～21
	第二章 2011（平成23）年		
	第1節 「旧熊野古道（+旧西高野街道）」	15～21	22～30
	第2節 「旧日光道中（往復）」	22～23	31～35
	第3節 「旧中山道（+千日回峰行道）」	24～31	36～44
	第三章 2012（平成24）年		
	第1節 「旧甲州道中（2分割／下り／前半）」	32～34	45～49
	第2節 「旧塩の道（秋葉古道）」	35～47	50～60
	第四章 2013年（平成25）年		
	第1節 「旧東海道 ⁵ ⁷ 次（+旧鳥羽・旧姫街道）」	48～55	61～68
	第2節 「旧奥州道中」	56～68	69～80
	第3節 「旧甲州道中（上り／後半）」	69～79	81～91
第五章 2014年（平成26）年			
第1節 「旧北奥ルート」	80～92	92～104	
第2節 「旧羽州街道」	93～119	105～126	

[下]	第十一部	全体集計一覧表	1～3	1～3
	第十二部	スルーハイク歩き旅から学んだ事＝拡張的想像思考	4～12	4～22
	第十三部	よく質問される事（QA）	13～24	23～38
	第十四部	多くの皆さんが夢へ挑戦	25～48	39～56
	第十五部	道中で浮かんだ替え歌	―――	57～64
	第十六部	エピローグ	49～51	65～68
	第十七部	新聞報道	52	69
	第十八部	アルゴディア研究会での学習会	53～54	70～71
	おわりに		55～56	72～74

1. 「歴史街道スルーハイク」に魅せられた動機と過程

60歳の会社定年退職直前に本屋で、図-3のとおり井上如著「塩の道ウォーク」(日外アソシエーツ社)の本に出会いました。その本の副題が「太平洋⇄日本海横断430キロ」でありました。「何だ、これは!」と強烈な印象が残りました。「これだな、これだ!」と、声を出してしまいました。「まだ見ぬ世界に行って見たい!」とする、憧れと願望が噴き出て、夢想の世界へ曳き込まれました。

さらには、登山雑誌に触れる中で、「スルーハイク(基点から基点まで一気通貫で徒歩により踏破する事)」「ロングトレイル(長い道を歩く事)」という言葉に惹かれました。日本地図を眺めている中で、ピークハント(山頂を目指す登山)だけではなく、「長い距離を歩く旅」という楽しみもあるのだなあと思うようになりました。「そうだ、私の『歴史街道歩き旅』を『歴史街道スルーハイク』と位置付け、計画的に取り組んで行こう」と思ったのです。

「歴史街道」と言えば、江戸時代に徳川家康が整備着手し、幕府直轄であった「旧五街道」の存在にも気が付きました。「旧五街道」は、今に置き換えれば国土交通省が管理する「一級国道」でしょう。その他に諸藩が管轄する「脇往還」と呼ばれる地方道が沢山あり、今日に繋がっているのです。そして、江戸期以前の昔から切り開かれて来た官道と云われる古道も沢山残されています。前記の「塩の道」も「歴史街道」に含まれるものだと分かりました。現在「古道・旧街道」と通称しているものは、古代の律令国家制度(一般に奈良時代・平安時代を指すが、大和政権時代を含む事もある)により整備が始まった広域行政区画を貫く「五畿七道」(図-4)の官道から始まりました。五畿は山城・大和・河内・和泉・摂津の畿内の5か国を指し、七道は東海道・東山道(後の中山道)・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道です。

それでは、なぜ、「歴史街道」の「スルーハイク」に特に思い入れが強くなったのかと言うその背景です。

還暦を迎え人生を一巡すると、「はじめに」に記述したとおりに、神仏との相互アクセス期の到来と言う認識の中で、これまでの人生はどうだったのか、俺と言う人間は何者なのか、残余の生きがい何を求めれば良いのかと言う自問が湧いて来ました。いわゆる半生の総括と反省、そして人生再築設計を如何に描くかです。特定の宗教宗派に心酔している訳ではなく、迷信や偶像崇拜に頼む事ではありません。自分にはないものを外に求める、外に頼ると言うような他者依存ではなく、神仏崇敬精神との接触に依って、本来の自分をより広く展開して行く、より高見へと引き上げる刺激になるのではないかと言う積極的な意味合いから考えた訳です。日常生活の自分は虚像なのではないか、理想像としてのもう一人の自分が既に潜んでいるのではないか、などとあれこれと浮ぶ雑念を整理したくなりました。ここで私の言う神仏とは、全てがお金の世の中にあっても、価値の物差しがお金ではない、何か偉大な理想像と言うものです。識者・学者と雖も言葉には表現出来ない何か偉大な存在です。

このような思いと共に、図-1の児童・幼児期と紅葉期に並存する「強がり三心、足掻きの三心、ぶつ

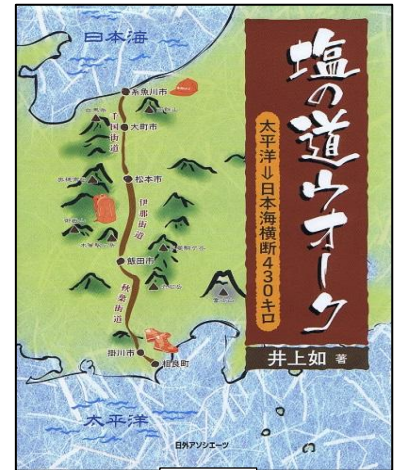


図-3

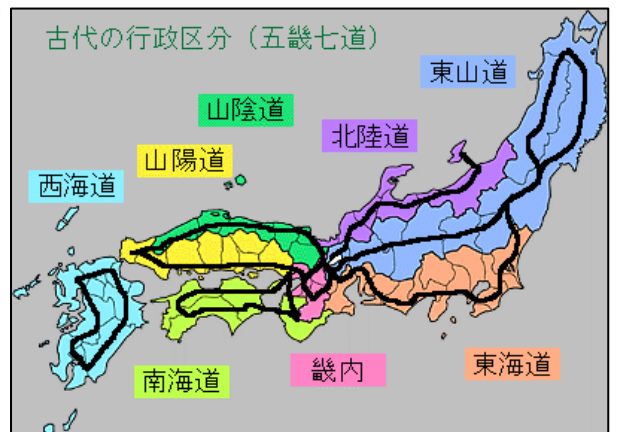


図-4

ぶつ三心」^{さんじん}との関連です。平坦で惰性に流される日常から脱出し、その先の異次元世界へ飛び込んで見たい、その中で、孤独感や不自由性も味わう遊歴生活を敢えて体感したい、そして、人間的に少しは高まって、すなわち甦って、新鮮さ、清新さを取り戻して、また日常生活に戻って来ると言う転換・再生願望が出て来たのです。このような心境に「神仏」の心が自然と絡んで来る思いを自覚出来るようになったのです。「神仏」との相互アクセスの念が濃くなれば、「歴史」(世の中の、地球上万物の森羅万象の出来事の積み重ね)の事に興味が深くなって行きます。この「歴史」と言えば、神社・仏閣、聖地・霊跡はもとより「石碑・石塔類の石造物」などの具体的な史跡に触れたり、「歴史街道・古道」に身を投じたくなりました。日常生活においても私の身近なこれらの遺跡・史跡には自然と目を凝らしたくなります。例えば石碑や石塔は「たかが石」ですが、これにも、そして山・森、磐座などにも神仏が宿っているものとして、いわゆる自然を崇拜して来たその心(アニミズム)は、吾が日本の建国以来、悠久の彼方から、久遠の時を繋いで今日までずっと大和民族に埋め込まれたDNAであります。私の言う「神仏」とは、さらには、現代の宗派・宗教法人とはまったく異なり、何物にも変え難い普遍的な精神性・何か偉大なもの・無量無辺^{だいわ}の大和精神と言う事があります。

見える物に対する物理的側面だけではなく、吾が家系の祖先から今日までの繋がりや社会の発展経緯、歴史的事象の背景に係る変遷、裏側の基層に流れて来た伝統など見えないものの精神的側面にも関心が強まって来たのです。若い頃は命の松明を燃やす勢いを感じたが、今は命のローソクを点している感じです。やがては、命の線香花火となって消えて行くのだろうと思っています。しかし、この細々とした心の^{ともしび}灯火が好奇心旺盛なのです。

このような心のいざないの中で、「歴史街道=歴史の道=歴史古道=旧街道・古道」を歩いて、ここを切り口に、国内の古今東西の歴史を感じ取りたいと思ったのです。そこから生涯学習の素材獲得の手段にしたいと思ったのです。一人での歩き旅は、自己欲求の実現場となり、自分に課した壮大な人間力テストフィールドとなり、自己の六根(眼・耳・鼻・舌・身・意)情報の洗心行場となり、私の身の回りに絡み付く森羅万象がトルネード・ツイスト現象、スパイラル・スイング現象を成して私を揺さぶってくれるだろうと予感したのです。

2. 定年退職

さて、2009(平成21)年6月5日、長年勤めた会社の定年退職を迎えました。この年のこの頃は、自宅の建て替えの真最中で、その年は、屋敷周囲の整理整頓でどこにも動かずに過ごしました。「歴史街道スルーハイク」のイメージを膨らます作戦期間としました。

「歴史街道」の魅力に取り付いた意識的なもう一面があります。足掛け42年間は、企業戦士と言われるビジネスマンに没頭し、サラリーマン生活に精進・邁進して来た、いわゆる「宮仕え」^{みやづか}の期間でした。これに対する反感みたいなものが潜在していたと思います。一担当から中堅処になって、中間管理職として役職名を貰い僅かずつであるが昇進・昇格もありました。しかし、所詮は「宮仕え」^{みやづか}の身でじっと我慢に我慢を重ねて来ました。心の中では相手(同僚・先輩・上司)を「この馬鹿野郎」^{ののし}と罵り怒っても、顔では「はい、承知しました。直ぐに取り掛かります。」と、とても気前の良い、歯切れの良い返事をしつつ行動した模範的な会社人生でした。長くもあり、あつと言う間の年月でもありました。

定年退職を迎えたらとても自由な気分を覚えました。短い余生を思う時、これからも他人から指示・命令され束縛される人生はまっぴら御免の感じになりました。いわゆる反動です。自由奔放で、縦横無尽に、悠々自適の生活を送りたいと思うようになりました。そして、発想力・想像力を最大限に広げたいと思ったのです。さらには自分が物事にどこまで対処出来るのか試したいと思う面も出て来ました。

不思議なものです。業務（仕事、組織）と言う束縛から解き放たれると、年齢の重ねとは裏腹に思考の柔軟化が増えて来るような気がするのです、頭の柔軟化は、「赤子」に戻るような気分になります。世の中の動きに敏感になると言うか、好奇心旺盛の感情になるのを覚えるようになります。それだけ、組織の中で否定的な「^{注1} あれしてだめ、これしてだめ」、あるいは強制的に「^{注2} あれしろ、これしろ」と言われる事、ルールに雁字搦めに縛られる事が、如何に融通の利かない四角四面の、偏った、杓子定規の人間に固めて行くのかと思知らされました。自分が「管理」の功罪の動物実験のサンプル（餌食）にされて来たと言う思いがあります。大袈裟に言うと融通が効かない頑迷固陋なヒト化（ロボット化）にされて、頭の中がよくぞこれほどまでに硬直していたのかと述懐し、今さらながら反省しています。（^{注1} / ^{注2}）神道界では前者は「禁戒」、後者を「勸戒」といい倫理規定の事です。

3. 歩き旅実行への決意と覚悟

2010（平成22）年、新しい年が明けると、「スルーハイク」に挑戦したく、居ても立ってもいられない、心の疼きを抑え切れない心境になりました。こうして「歴史街道歩き旅」に係る行動を本格的に開始したのです。個別には後述します。

（1）実動着火トリガー

2010（平成22）年5月21日（金）、旧奥州道中から別れる旧羽州街道分岐の地点を確かめたく福島県桑折町（福島市の北部）に出掛けた時です。その分岐点には東屋があります。一人の男がザックを背負って歩いて来て、その場所で休憩を取ったのです。何気なしに声を掛けました。するとその人は、胸のポケットからさり気なく紙切れを出して、私の目前に差し出したのです。それには、^{図-5}のように、日本4島の海岸沿いの道筋にぐるりと赤い線が描かれていました。また、旧五街道ルートが赤く染まっていたのです。「全て歩行したのです、この旧奥州道中が最後だと思い、青森まで歩く途中です。歩きは結構大変なんですよ。」「神奈川県茅ヶ崎市在住の81歳、66歳から歩き始めてこれまで15年くらい掛った。」と話されました。私と同じような体形の方でしたが、三浦雄一郎さんと共通する超人的と言う他はありません。もう既に私の思いを遥かに超える稀有な人がいる事を知り、強い仲間意識を感じました。（なお、時を今にして見るに、この旧奥州道中を私が歩いたのは64歳ですが、その方は81歳でのスルーハイク挑戦中だった訳です。）



図-5

（2）後押しとなった名句

その後、あれやこれらと思いを巡らしている中で、実践行動の勇気を後押しする次の三つのフレーズが浮かんで来て、「よし、実際に歩こう」と、決意と覚悟の契機になったのです。モヤモヤ鬱積ガスに着火の切っ掛けとなったのです。

a. 「Boys, be ambitious（少年よ、大志を抱け）」

——叱咤激励、勇往邁進の後押し——

新島襄の紹介により、日本政府の熱烈な要請を受けて、1876（明治9）年7月、札幌農学校教頭に赴任したアメリカ人のクラーク（ウィリアム・スミス・クラーク）博士が同校1期生との別れの際に贈った言葉です。

全文は「Boys, be ambitious like this old man」であり、このまま訳すと「この老いた私のように、あなた達若い人も野心的であれ」と言う意味（ウィキペディアより引用）になります。中学の頃の授業で聞いたような記憶がします。国民の殆どが知っている言葉だと思います。声を出して読むと内心力が鼓舞されます。何度聞いても、何度発声しても力強い素晴らしい響きがあります。社会人となってからも青年期まではこの言葉が何時も心の中にあったような気がしています。一時忘れかけていたが、還暦を過ぎ、前述したように人生の閉じ方に向けての足踏み期間に入って来たら、また思い出して甦って来たのです。「少年」の心は、図-1の児童・幼児期の心の近くにあります。今の自分はまだまだ未熟者の^{はなた}涙垂れ小僧と自覚しています。このような自分にぴったりの言葉だと思っています。

b. 「青春とは人生のある期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ。」

———そもそも「青春」の言葉に感じないようでは、墓穴を掘っているも同然———

幻の詩人とも云われている「サミュエル・ウルマン（ドイツに生まれ、後世はアメリカで過ごした人）」が書いた「青春」の詩の冒頭のフレーズです。1920年4月、ウルマン80歳の誕生日を祝って、ウルマンが長年書き留めた詩集を、家族が発刊したが、その巻頭に掲載したもの（新青春の会のホームページ等より引用）です。

この詩は、色々な人から翻訳されていますが、岡田義夫さんが訳されたものはテンポの良い言葉が連なっており、私が大好きなフレーズとなっています。長い詩文となっているので、その中から次の3フレーズをピックアップして記述します。

人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる。

人は自信と共に若く、恐怖と共に老ゆる。

希望ある限り若く、失望と共に老い朽ちる。

このウルマンの「青春」の詩は、恥ずかしながら50歳で初めて知りました。現役時代にある先輩から教えられたもので、強烈な印象がありました。それ以来、^{とりこ}虜になり、今の私の生きる興奮を刺激してくれる素晴らしい言葉のフレーズとなっています。今の紅葉期の心を刺激するにとっても相応しい応援歌です。

c. 「^{まさ}將に東遊せんとして壁に題す」

———東奔西走、飛耳長目の後押し———

初めて知ったのは斎藤孝著「声を出して読みたい日本語その2」に記載されている、江戸時代末期の勤皇僧、^{しゃくげっしょう}釈月性の詩です。

「男児志を立てて ^{きょうかん}郷関を出づ ^{がくも}学若し成る無くんば ^{また}復た還らず、^{ほね}骨を埋むるに

^{ふんぼ}何ぞ墳墓の地を期せん ^{じんかん}人間到る ^{ところ}処 ^{せいざん}青山有り」

その意味合いは、「男子が一旦志を立てて故郷を後にしたからには、万一、学業が成らなかったら死んでも帰郷しない、と言う決意を持ち続けるべきだ。先祖と同じ墓地に骨を埋めなければならないと言う事はない。広い世の中には自分の骨を埋める事ぐらいの場所はどこにでもある。だから、志を達成するためならどこにでも行って、大いに活躍すべきだ。」なお、「人間」は、「じんかん」とも読み、世の中の意。「青山」は墓地の事。

この詩を読んだ時、脳裏をふっと横切ったのが千日回峰行者の覚悟の事です。どんな理由にせよ、途中で行を続けられなくなった時は自害する決まりで、そのために首を吊るための紐と、切腹する短刀を常時携行する。頭にはまだ開いていない蓮の^{つぼみ}蕾を象ったヒノキの笠を被り、白装束（死に装束）を^{まと}纏い、草鞋履きと言う出で立ちで、約7年間掛けて、通算1千日・4万kmを歩く荒行です。私は、この詩に共感を覚えるのは次の理由からです。私が仕事を持っていた現役時代の足掛け42年間で16個所の職場を経験

(1個所当り平均2年6か月余りの勤務期間)し、家族との同居の住まいは自宅外山形県内のみの7個所、独身・単身赴(山形県外もあり)を含めて合計16個所に及びました。人事異動に伴う転勤は当たり前として過ごして来たので、知らない土地に行って当地の人達皆と仲良く付き合いしなければならなかったのです。この詩には、別の一面哀愁とか郷愁が感じられるのです。

そのような事から永住地をここにしなければならないと言う義務感はありませんでした。だからこそと言う訳でもないが、生まれた故郷は山形県最上郡金山町ですが、ここ山形に住居を構える事に何の迷いも躊躇もありませんでした。一般的には、道路拡張等の土地買収を受けて移転した、息子が家業を継がず親の死去を機に転居したなど様々な理由により、先祖伝来の土地・家を離れる人は珍しい事ではありません。つまり、自分が生まれた土地・家を変える人達が世の中には沢山いるのです。

このような考えに至ったもう一つは会社現役時代「どんな職場に行こうとも、住処がどこになろうとも、24時間365日、吾が社の企業人たれ、いつも会社の看板を背負っていると思え、どんな環境になろうとも全身全霊で全力を尽くせ、つまり、私的な時間だから何をやっても(悪事を働いても)許せるという考え方では絶対にだめ! この会社に勤めていると言う自覚と自信と誇りを持って、壁に耳あり障子に目あり、気を抜くな、油断するな」と繰り返し教育・指導されて来た事の影響もあると思っています。

こんな思いからなのか、「旅(→遊行、周遊、巡覧)」に無性に憧れるのです。^{しゃくげっしょう} 積月性のこの詩の一節「学^も若^{なる}し成^むる無^くんば 復^また還^{かえ}らず」のフレーズを私の歴史街道スルーハイクに重ねて、「最終ゴールに至らずに途中で放棄したら自宅には帰られない。」と言う強い思いで取り組んで行く決意になって来たのです。

ところで、上記積月性のこの詩から次の事も浮かんで来ました。

その1:様々な天変地異で、住まいが、地域が被害を受け、まったく別の場所に移転せざるを得ないと言う事態があります。そんな時、中には、暮らしの場が変わる事に強いストレスを感じたり、移転に強固に反対したり、自らの命を断ったりする人がいるようです。自分の生まれた地に強い愛着を感じるのは理解できないことはないが、そこまで自分を追い詰める事に不思議な一面を感じます。はっきり言えば。心に余裕がない、柔軟性がない、補償金ねだり、我欲が過度? なのではないかと疑義を抱かせる。世の中には、全国を股に掛け、世界に羽ばたいて、昼夜を問わずに仕事に飛び回っている人、その家族が沢山いるのです。そう言う人達の中には、自宅の周辺ではなく、出先で亡くなる人も沢山います。

その2:ダーウィンの「種の起源」の一節にあるとされる、「最も強い種や最も賢い種ではなく、最も変化に強い種が生き残る」と言うフレーズです。(誰かの創作・偽作だと言う説があるようです。)創作者が誰であろうと、共感を得る名言だからこそ色々な処で引用されます。小泉純一郎元首相は、2001(平成13)年9月27日の第百五十三回国会における所信表明演説で引用しています。また、安倍晋三首相は2015(平成27)年2月12日(木)の第189回国会における施政方針演説では岡倉天心の「変化こそ唯一の永遠である」の言葉を引用しています。人間が生きて行く上で大事な事は、思想的な保守とか革新とかの色分けではなく、社会の変化に即応出来るか否かであると言う教訓を読み取れます。「世の中の変化に着いて行けない」などと、物分りを得たように語るお茶飲み話は、私からは心底、同情・賛同する気にはなりません。世の中の変化を自分の眼で読んで行くと言う気構えは誰にもあるはずだが、そんな愚痴は自ら放棄しているようなものです。真に^{もったい}勿体ない人生です。

第二部 希望計画ルートの検討

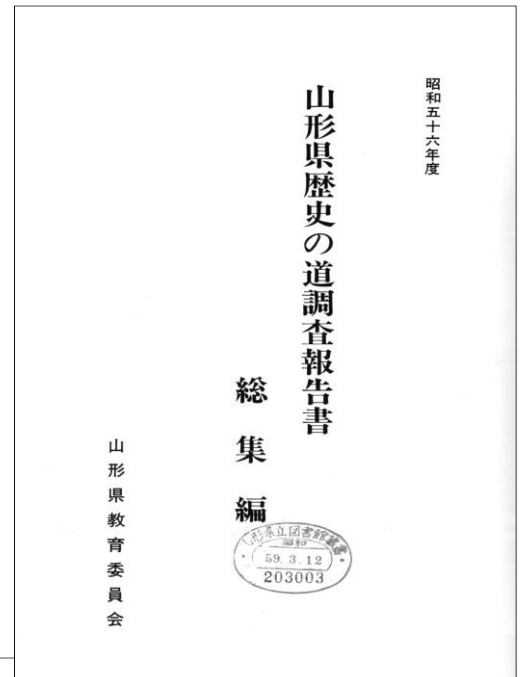
いよいよ具体的な「スルーハイク」に向けた取り組みです。歩きたい希望の歴史街道は山ほどあります。年が明けると、「さて、今年はどこから始めるか」とうずうずして来ます。インターネットや書籍で下調べをしますが、甲乙付け難いのです。どれを先にするか、「のうみそ」の中で取捨選択の格闘が始まります。やがて淘汰・収斂しゅうれんされて優先順位の決定付けが行われます。まずは一番目の歴史街道、それも名の通ったものを対象に掘り下げた本格的な資料収集・調査・検討に入っていきます。その歩き旅が終わると、同様の取り組みを繰り返して行きます。前回二番目のものが今回の検討で一番目に順当に繰り上がる事は余りありません。つまり、次点が繰り上げ当選とは限りません。

現地において実際に歩く道筋・ルートは昔からの、古くからの「交易・物流の道、軍馬の道、信仰の道」です。そのルートを確定するための検討です。

1. 「歴史の道」調査報告書

歩きたい「歴史街道」を決めたものの、客観的なルートとほどの道筋なのか、と言う問題意識が湧いて来ます。

例えば「私は熊野古道の全道 850 kmを歩いたよ」と胸を張っても、自慢しても、「本当に『熊野古道』なのか？ ただ国道・県道を真っ直ぐ歩いたのではないか？ 近道をしたのではないか？ 本当に全道なのか？」などと言われかねません。社会的・公的・客観的に認知されたルート・基点でなければ、自己満足に過ぎません。私は自分勝手な自己満足の終焉では心の芯真しんしんの満足には至りません。現に「旧東海道」トレイル中で、会話したある方からそのような事についてはっきりと疑問を呈されました。辰濃和男氏はその著書「四国遍路」（岩波新書）で、「山道志向」の人と「国道志向」の人がいると言うのです。もちろん、私は前者です。後者では、もはや「歴史街道歩き」とは言えません。単なる「生活臭がするお楽しみウォーキング」です。そのような疑義に耐え得るには、目的とする「歴史街道」のルート、つまり「道筋」を客観的に定める必要があります。私が勝手に引いた「旧熊野古道」や自己想定「旧東海道」のルートでは、胸を張る資格はない、そもそも自分が納得しません。はてどうするか。初めは悩みました。つまり、昔から歩かれて来た道筋のルートを定義する事の問題意識です。今も歩けるか否かの判断と言う意味ではありません。今は歩けない廃道になったとしてもそれ自体が問題ではありません。国道・県道・市町村道・林道など、歩く事に何の抵抗・も伴わない車道を繋げる意図はまったくありません。



付	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
歴史の道調査員名簿	最上川	小国街道	浜街道	最上小国街道	青沢越街道	会津街道	茂庭街道	越後街道	二井宿・大塚街道	米沢・板谷街道	仙台街道・寒風沢・軽井沢越	村山西部街道	小滝街道	孤越街道	二口街道	関山街道	笹谷街道	六十里越街道	羽州街道
.....
89	85	77	68	66	65	62	60	52	38	36	34	32	31	29	27	25	23	17	1

図-6

そんな中、世の中には客観的に認知されている「歴史街道」のルートがある事が分ったのです。

それは、吾が国政府の文化庁が、昭和 53 年度以来「歴史の道」の調査・整備事業を推進し、各都道府県教育委員会が実施主体となって行った調査結果を『「歴史の道」調査報告書』として取り纏めている事です。いわば国の直轄事業として確定した客観的な基本資料があったのです。図-6 は、山形県教育委員会の同報告書の表紙と目次の一例です。それに依ると羽州街道から最上川まで 19 のルートを調査して纏めたのです。

図-7 は、「旧羽州街道」に係る歴史的経緯とルートの明示であります。もちろん、昔から、山崩れや川の氾濫、地震などの自然災害があり、その都度ルートを変更し、あるいは、さらに便利なルートを求めて、新規開削なども加わり、ルートは時代の変遷と共に変化して来ました。残されている文献等を頼りに、生存している古老・長老や地元歴史関係諸団体等の意見も参考に、江戸時代などに作成された古絵図があれば、そこに描かれた道と突合わせを行い整理・確定したものと思われます。同報告書に掲載されているルートは、国土地理院の縮尺 5 万分の 1 地形図に記載しています。いずれにしても、現在において、最も信頼に足る客観性の高い資料は同報告書を置いて他にありません。「歴史街道」そのもの、つまり昔からの道の確定に関しては、最高権威の書籍となります。

世の中には、「歴史街道」に係る様々な観光パンフレットや書籍が販売・流布されているが、そのルートに係る内容は同報告書を基にしています。同報告書に準拠していないものは単

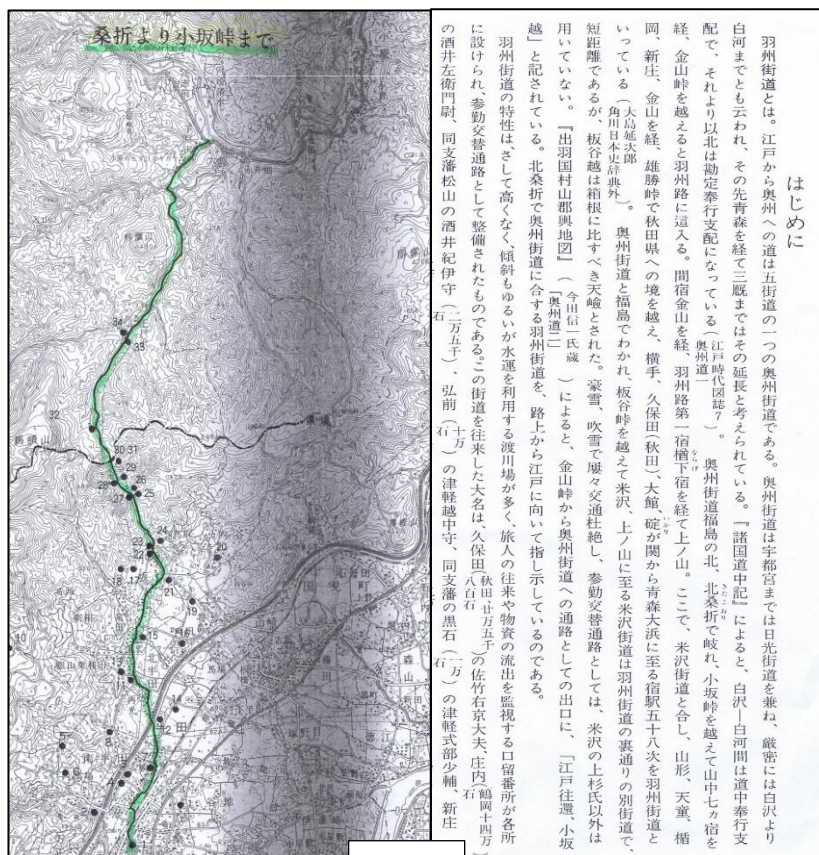
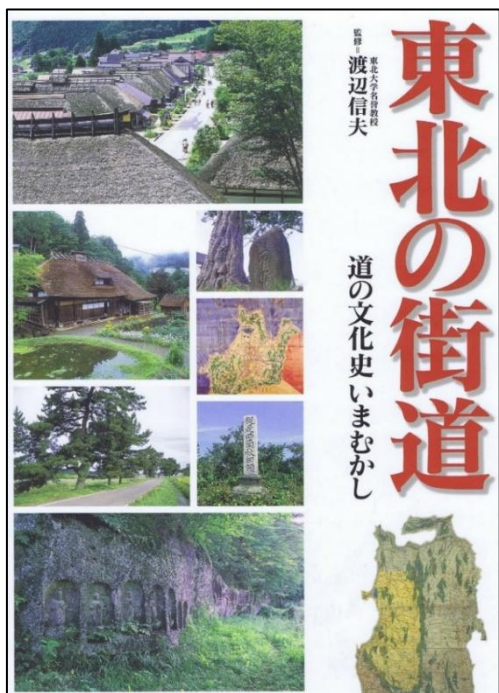


図-7



主な参考文献

- 『歴史の道』調査報告書 浜街道 (福島県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 水戸街道 (福島県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 白河街道 (福島県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 下野街道 (南山通り) (福島県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 越後街道 (福島県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 二本松街道 (会津街道) (福島県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 相馬街道 (福島県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 米沢街道 (福島県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 岩谷街道 (福島県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 江戸浜街道 (宮城県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 二口越え殿上街道・関山越え殿上街道 (宮城県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 最上街道 (宮城県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 仙台街道 (宮城県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 仙台街道 (軽井沢越・寒沢越) (山形県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 最上小国街道 (山形県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 米沢・板谷街道 (山形県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 会津街道 (山形県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 仙台街道 (山形県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 越後街道 (山形県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 六十里越街道 (山形県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 奥の細道 (一) (山形県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 奥の細道 (二) (山形県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 最上川 (一) (山形県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 浜街道 (山形県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 気仙沼街道 (岩手県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 盛岡街道 (岩手県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 大槌・釜石街道 (岩手県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 宮古街道 (岩手県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 久慈・野田街道 (岩手県教育委員会)
- 『歴史の道』調査報告書 浜街道 (岩手県教育委員会)

図-8

なる私的イラストです。眺め物に過ぎません。図-8は、市販されている本の表紙と巻末の参考文献です。同図下のように各県の「歴史の道」調査報告書の文字がずらりと並んでいます。圧巻です。

.....

私の後記する実際の歩き旅において、様々な方と情報交換して来ましたが、殆どの方が観光パンフレットに頼っていました。前記辰濃和男氏の言われる「国道志向」の人達でした。私みたいに古い道筋に拘って危険を冒してまでの歩き旅は、建前上は推奨されませんから当然と言えばそのとおりでしょう。しかし、古道の味わいは、道の整備有無ではなく、昔から人々が歩いて来た道そのものを歩く事から体感出来ます。

図-9は、市販されている「信仰の道 秋葉街道（白馬小谷研究所発刊）」の本の表紙と内容です。作者は、ルートについては国土地理院の承認を得て、その縮尺2万5千分の1の地形図（同図左上）に表示しています。この本の巻末の参考文献にも「歴史の道」調査報告書はもちろんの事、様々な関係レポート（同図右下）を掲載し、客観性を担保しています。なお、国（文化庁）に依る同報告書の作成は、昭和53年度から開始したもので、極めて近年の作業であります。同報告書はもちろんルートだけではありません。沿道の文化財や史跡、当時の宿場の様子など近世・現代までの歴史的な変遷全般について詳細に記述・解説しています。この調査報告書そのものが、既に文化財としての価値があるものと思っています。

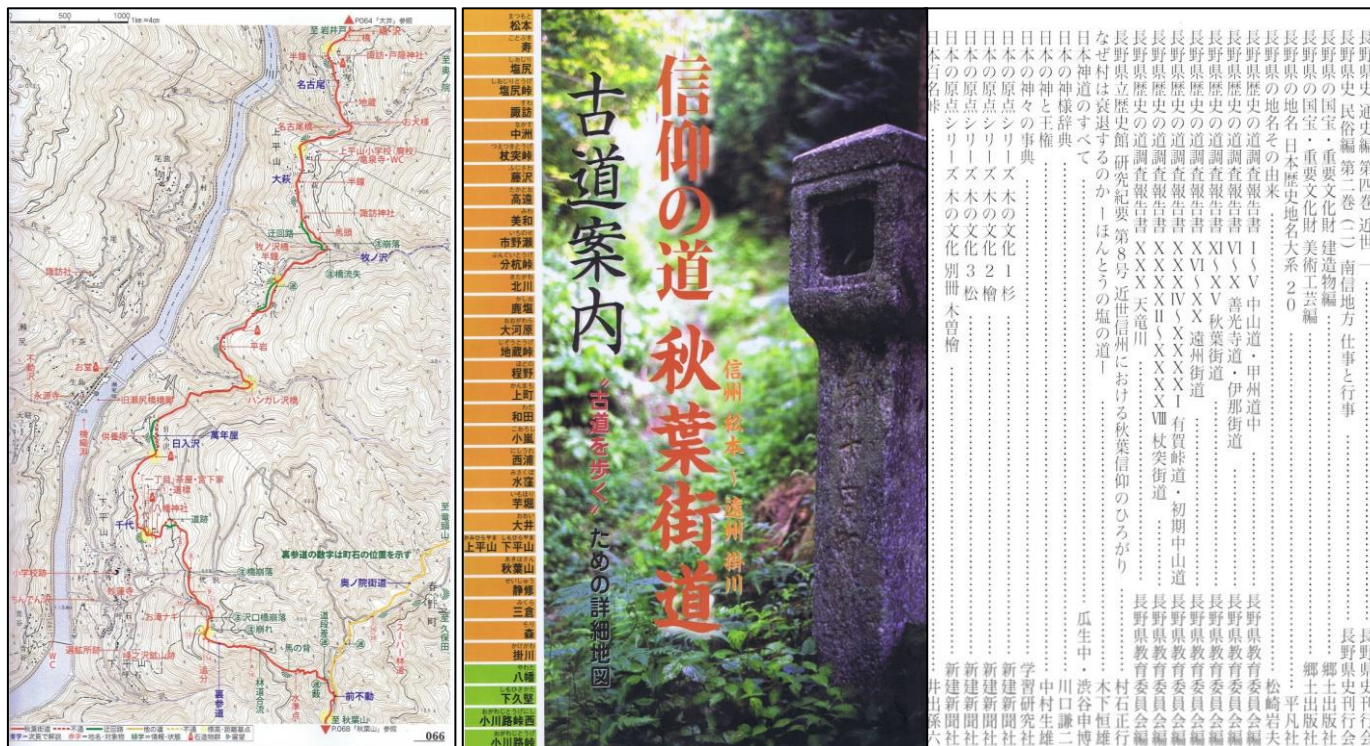


図-9

2. 関係基礎資料の収集

以上のような基本となる資料の存在を踏まえた上で、私の事前調査対象の「歴史街道」に係る次のものを揃えます。

- ① 私自ら図書館に出向いて同報告書を確認し必要箇所をコピーする。どうしても必要なものは他県図書館から借用する。
- ② ルート・地形図を掲載している関連書籍を買い求める。
- ③ 地元の観光協会等からルート・コース掲載のパンフレットを取り寄せる。

④ インターネット上に歩行体験者がルートを公開している場合もあり、それをパソコンに保存する。

⑤ 地元の教育委員会に問い合わせ、所要の資料を入手する。

など、これら5点の関係資料を手元に用意し準備を整えます。

なお、「歴史の道調査報告書」や書籍に掲載のルートは、国土地理院の5万分の1地形図に記載したものの、縮小されているものが多く、いわゆる潰れた状態での記載と言うのが現実です。

また、背負う荷物を少しでも軽量にしたい事から、当該「歴史街道」に係る事前収集の関連資料・情報は、ペーパーのままでは持参しません。全て自宅で電子化します。冊子状のものであれば、裁断し、いわゆる「自炊」処理をして電子書籍化（PDF等に）します、ペーパーレス環境にします。

3. 希望計画ルートのイメージ確定

上記資料を総合的に照合しながら吟味し、精査検討を深め、目標とする「歴史街道」について客観性のより高いルート・道筋を確定します。確定と言っても、この時点では頭の中に書き込むイメージであります。この時点ではいわばアナログ確定とも言えます。次に実践的な確定作業、いわばデジタル確定に入っていきますが、その内容は後段に記述します。

4. 「悲観的に準備し、楽観的に対処せよ」

リスクの予見性について、次の事が浮かんで来ました。この言葉は佐々淳行氏（日本の警察官僚OBで危機管理評論家として活躍）が、その著書や講演で力説・強調している言葉です。また、この姿勢は、「部隊指揮官、経営者などばかりではなく、一家の主人にとっても大切な心得なのである。」とおっしゃられています。これは至言だと思います。つまり、日本の古くからの格言「段取り八部」と共通します。会社生活時代の電力エネルギー産業に従事して来た足掛け42年間は、まさに毎日が危機管理に囲まれて来た環境であった事から、殊更この言葉に納得し惹かれます。類似の言葉に「先憂後楽」があります。その意味は、常に民に先立って国の事を心配し、民が楽しんだ後に自分が楽しむ事。中国は北宋の忠臣范仲淹が為政者の心得を述べた言葉との事です。私観では転じて、先に苦勞・苦難を体験した者には、後に安楽の境地が舞い込みます。

いずれにしても、このような精神は一朝一夕に生るものではなく、日々の日常生活の感じ方の積み重ねに由来するものと思います。私はこの基本方針は日常生活の中で意識しているので、この歴史街道スルーハイク歩き旅に臨む時は、格別意識するまでもなく、心身が素直に反応する気がしています。ただし、このような言葉に神経過敏な人は、先立つ不安の渦中に吸い込まれ、神経衰弱、精神性疾患に陥る危険を伴います。何事も平時から「人事を尽くして天命を待つ」。この姿勢・人生観が結果して目的達成に繋がって行くものと思っています。そのような思いの継続は自然蓄積し、いざ本番ではピンポイント着地へと、神仏（本当はもう一人の自分）が上手く誘導してくれます。

第三部 前行程の楽しみ～〔大香ブランド^{だいこう}老魂^{RouCon}サブタイトル〕の設定

前記第二部において希望計画ルートのイメージを確定した事から、いよいよ歩くと言う実践に向けて心の準備に入ります。そうすると次のような思いが湧き上がって来ます。

歴史街道を基点から基点までとは言え、ただ漫然と歩くだけではつまらない、歴史物が好きとは言え物理的な寺社の建物・仏像に接しただけでは満足感は得られるのか、知らない土地に行ってみたいとの欲求だけの歩き旅では、充足感が得られないのではないかと思うようになりました。また、途中で弱音・挫折感も出てくるかもしれないと言う恐怖の念も想像出来ます。

原点は、後記「第十部 スルーハイクの個別記録、第一章 2010（平成22）年、第1節 『番外編—旧塩の道（秋葉古道）』トレイル」の悔しさと反省点がありました。

そこで、歩き旅を持続するための精神的支柱を立てたい、心の中に夢と理想を固める太しき宮柱を立てたい、心の芯棒に情熱を^{たきつ}焚付ける火薬を詰めたいと思ったのです。そのために、「歴史街道スルーハイク」の歩き旅に明確な意義付けをしよう、それも楽しくなるような、内奥から決意と覚悟と勇気が湧くようなコンセプト（概念、新しい意義付け）とミッション（初志貫徹を加勢する作戦任務）を設定し、それらを凝縮したサブタイトル（うたい文句）を掲げて、オモシロイ取り組みを行おうと思ったのです。歴史街道の歩き旅ですから、換言すれば、過去と現実と未来との架け橋の存在をイメージしたのです。付加価値（他にはない独自性）の導入です。新たな価値の創造です。



図-10

ここに図-10（長野県飯田市南信濃和田諏訪神社の霜月祭り／インターネットより）のとおりの「^{注3}湯立の儀式」をイメージ（創作）します。その湯立釜に前記図-1にあるこの歳相応の「^{せきし}赤子（児童・幼児期）の心」と「老（今）の力」を放り込みます。煮沸・混合されて新たなエネルギーの萌芽が始まります。仕上げはそれに「コンセプトとミッション」の塊^{かたまり}を落とし込むのです。沸騰は増々盛んになります。煮え^{たぎ}滾ったお湯は湯気が飛んで行って空になると思いきや釜の底には、曼荼羅金胎^{から}両部界からの使者たる小さな「神（=芯）柱」が出来ているのです。その「神

（芯）柱」の放つ力には一切の制約はないのです。宇宙のあらゆるものを飲み込みます。この金胎^{しんぼしら}芯柱を心の「^{注4}笈」に入れます。これに呪いをかけて凝縮し、それをポケットに入れて歩く事にしましたのです。

これら大言壮語の思いを創作し、「Romanesque a la Concept & Mission」（ロマネスク風のコンセプトとミッション）と銘打ち、さらに、Romanesque a la Concept & Mission の綴りから一部の文字「RouCom（m→n・ん）」を取り出し、「老魂」に当て、「老魂」と表記する事にしました。

「日本国語大辞典（小学館）」に依ると、直訳的には、ロマネスクとは、「ロマン（仏: roman）」から派生し、自由奔放な想像力によって現実の論理・事象の枠を飛び越えた幻想的な性質を指すとの事です。その世界でコンセプト（概念）とミッション（任務）を掲示するのです。

（なお、「a la」は前置詞で「…流の [に]、…式の [に]」です。）

要約・具体化すると、歴史街道を歩き通す初志貫徹心を鼓舞するために、非現実的な物語風概念と任務を創作し、その思いを文字（言葉）に綴って表現する事です。その時、頭に「大沼香の大と香」を摘み

出し、それらの事を全体包括して略称〔大香ブランド^{だいこう}老魂サブタイトル^{RouCon}〕としたのです。前記「神（芯）柱」がこの老魂サブタイトルそのものです。

具体的なトレイルに入る前の計画の段階で、スルーハイクに掛ける思いを凝縮した短い言葉のキャッチフレーズを考え、書面にあれこれ書いて、書いては訂正し、「老魂サブタイトル」の中身のイメージを盛り上げます。自分に気合を掛ける鞭^{むち}ですから、楽しくなるように、夢想・空想・妄想の世界で言葉遊びをします。自画自賛・自己陶醉・大言壮語・自己満足の大花火大会の境地です。

設定過程をより具体的な角度から説明します。同サブタイトルの具体的な言葉のキャッチフレーズは、これより前段の「第一部 プロログ」ならびに「第二部 希望計画ルートの検討」の中で浮かんで来た事を踏まえる形となります。その目標とする希望の歴史街道に係る様々な歴史的背景、つまり、駆け抜けた歴史上の著名な人物や道沿いの神社仏閣、名所旧跡などを整理します。また、街道沿いの現代の風景をも想像します。いわば、その歴史街道に纏わる新旧の情景を併流させながら、私の思い・夢・願いを溶かし込んで、その中で浮かんで来る言葉（文字）を綴る事とします。

一つのスルーハイク遊学紀行に大義名分を与え物語性を持たせる事です。歩く事の大義を〔大香ブランド老魂サブタイトル〕のフレーズに仮託し、その言葉の力を心身の推進エンジンとします。機動性の活力源・動力源となります。

=====

同サブタイトルは個別のトレイル毎に設定するが、実際の取り組み事例、具体的な言葉の綴り・キャッチフレーズの例を3点挙げて見ます。

- ✔ 2012（平成 24）年 9 月 27 日（木）～10 月 16 日（火）までの 19 連泊 20 日間の「旧塩の道（秋葉古道）」スルーハイクにおいては〔福島原発放射能汚染の太平洋浄化大作戦〕と設定しました。
- ✔ 2013 年（平成 25）年 9 月 4 日（水）～10 月 1 日（火）までの 27 連泊 28 日間の「旧奥州道中」スルーハイクにおいては、〔蟻の一穴ブレイクスルー・・・東北縦断“日本第 3 運河開通”大作戦〕と設定しました。
- ✔ 2014（平成 26）年 9 月 14 日（日）～9 月 30 日（火）までの 16 連泊 17 日間の「旧羽州街道」スルーハイクにおいては、〔六十五^{むっご}ハート全開一奥羽両州連結大作戦〕と設定しました。

.....

実際に歩いている時は、この老魂サブタイトルが折りに触れて浮かび、自問自答の反芻^{ほんすう}世界が広がって来ます。まさに推進力を得た感じになり、萎えた弱音、不甲斐なさが吹き祓われる思いになります。

歩く中で視界はどんどん変化するが、時には心の中は単調さを覚える時間帯もあります。思考回路が千編一律の様子になる事もあるが、そんな閉塞状態に陥ると、ふと〔大香ブランド^{RouCon}老魂サブタイトル〕のフレーズとその設定過程が浮かんで来て、退屈が吹き飛んでしまいます。その〔大香ブランド老魂サブタイ

トル]が入っている笈をポケットから出し入れするようなものです。こうすると、実際の歩きの中では、「のうみそ」の中は、創作・想像の世界が漂流し、時に深化の域へ、時には発散の域へ、開展と制御が入れ乱れて躍動するフレキシブル空間——つまりは、トルネード・ツイスト現象、スパイラル・スイング現象——に変化し、とてもとても楽しくなるのです。

本書を通して、掲載の14件の[大香ブランド^{RouCon}老魂サブタイトル]の具体的な文字とその設定理由を読んで行くと、結局は「大沼のこれは、何の事はなく、単なるこじつけ、屁理屈、^{けんきょうふかい}詭弁の牽強付会（道理に合わない事を、自分に都合の良い様に無理にこじ付ける事）ではないのか、と言う疑問が湧いて来るとは思いますが、当然の事です。そのように見破った方が正常です。私が異常なのです！？」

後記の個別のスルーハイクの中において、同サブタイトル設定の背景事情を記述するが、文字（言葉）の記述（並び）に、現在と過去と将来を往来・交渉する使い方の部分に前後の齟齬、矛盾を感じる処があるかもしれないが、戸惑う処があろうかと思いますが、つまり、文法上の誤りがあるかもしれないが、真面目に考えないでパスしてください。私の想像力の遊びの世界ですから。眠りの中の夢には辻褃の合わない自己撞着の世界が表れるものです。

(注3) インターネットのウィキペディアより。湯立（ゆだて/ゆだち）とは、神前に大きな釜を据えて湯を沸かし、神がかりの状態にある巫女や神職が持っている^{へいぐし}篋・幣串をこれに浸した後に自身や周囲に振りかける儀式の事です。神事として全国各地で行われていますが、長野県遠山郷の霜月祭りが、古い形態を今に伝承しており国の重要無形民俗文化財に指定されています。

(注4) インターネットのコトバンクより。山伏修験者、遊行者が法具、仏像、経文、衣類などを納めて背負い歩く箱をいい、**図-11**のようなものです。



図-11

「スルーハイク」への期待感が高まって、いよいよ実践に向けて、諸準備を整え一步を踏み出すに当たっての4原則の誓いを立てる事にしました。(結果して、本書に記載した全ての歴史街道スルーハイク遊学紀行において、この4原則を貫徹出来ました。)

1. 「歴史の道 調査報告書」に掲載のルート等**客観的な道筋**を辿る。

その内容は、前記「第二部 希望計画ルートの検討」、後記「第五部 希望計画ルートの電子化」において記述するとおりです。

2. 全ルート上に歩かない空白部分(隙間)を入れない。

泊まる宿の総てが必ずしも歴史街道ルート沿いにあるとは限りませんので、ルートから遠く離れた宿に行かざるを得ない場合もあります。あるいはルートを一旦離れて、寄り道紀行の散策をする事もあります。そのような場合であっても、ルートに復帰する時は、必ずルートを離れた元の位置に戻ってスタートします。つまり、全ルート上に歩かない空白区間は絶対に生じさせない誓いです。

例えば、図-12の事例において、当日のトレイル終点はJR線A駅の所——1日の予定時間を歩き切りたいが、電車の発着の時刻との兼ね合いもある。——とします。宿はその10km先のB駅から歩いて30分の所であれば、A駅からB駅までは電車を利用し、その先宿までは歩きます。翌日はB駅からA駅に向ける(戻る)電車を利用し、A駅前の前日終点を当日の始点としてそこから歩く事にします。

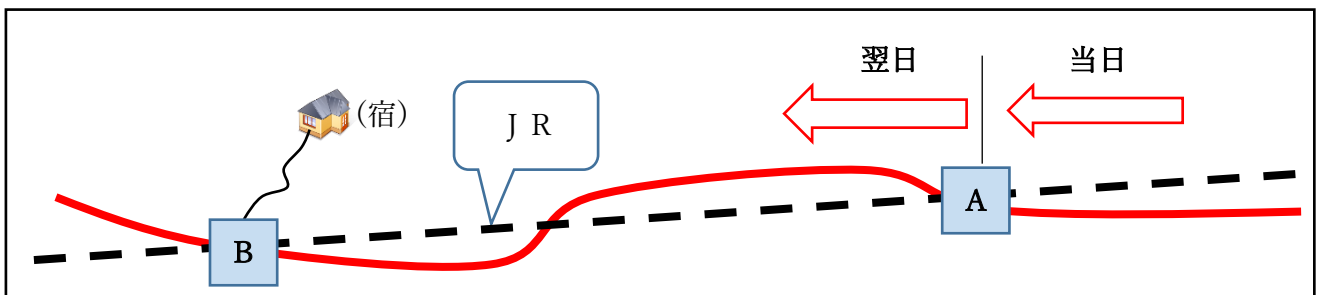


図-12

3. 全ルート上を2足の歩き(歩点・歩幅)で繋ぎ、電車、車などの動力は一切使わない。

歩きの途中で「疲労困憊だから」とか「荷物が重いから」などの理由で、あるいは「乗せてあげるよ!」と言う人の好意があったとしてもそれは断わり、公共交通機関やタクシー等は一切利用しない、他人様の車などに絶対にお世話にならない誓いです。

4. 最初のスタート基点から最終のゴール基点までの途中に休息日は入れずに一気通貫で歩く。

私の「スルーハイク」とは、一つ(一本)の歴史街道を最初のスタート基点から最終のゴール基点まで一気通貫で歩く事です。ただ歩き通せば良いと言う事ではありません。一方の基点のスタートから他方のゴールの基点まで歩く間で休憩日・安息日は入れない事です、連日連泊連続歩行です。高熱が出たとか、足を捻挫して動けなくなった等の非常時はともかくとして、発熱・下痢等の体調不良があったとしても、本トレイルをスタートしたら後記「第五部 希望計画ルートの電子化」で確定した歴史街道ルートをゴールまで連日歩き通すことです、体調不良は我慢することです。仮病とか、風邪気味とか、何とか言い訳をして、いわゆる目的のルートを歩かない休日絶対に取らない事です。

第五部 希望計画ルートの電子化

前記第二部で希望計画ルートのイメージを確定（アナログ確定）し、前記第三部で「大香ブランド老魂^{だいこう}サブタイトル」を設定し、前記第四部で4原則の誓いを立て、心の準備が整った事からその計画ルートについて、道筋の正確性と客観性を高めるためにデジタル（電子化）対応を図って行きます。次に順序立てて説明します。いわば計画ルートの最終確定作業です。

まずは、前記「第二部 希望計画ルートの検討 2. 関係基礎資料の収集」に記載した5点の資料を手元に揃え、頭の中で描いたアナログ確定ルートのイメージを整理します。

1. パソコン上での作業

次に自宅のパソコンの大きな画面（ディスプレイ）に向かい、「カシミール3D（有料／無料）」を起動し、「国土地理院の地形図（以下『電子国土』と言う）」を表示します。この画面上において、計画ルートを歩いているイメージで、ルートの最初のスタート基点から、適当な間隔で点を打ちながらそれを繋いで線を書き込んで行きます。その作業を繰り返しながら最終ゴール基点まで書き込んだら確定し終了処理をします。これで計画ルートは電子化されたのです。つまり、アナログ・イメージの希望計画ルートは電子データ化、デジタル化され、電子ルートになったのです。この作業の時は、前出5点の基礎資料を手元に置いて、ルート沿いの様々な歴史物や街並み・風景を想像しながら書き込んで行くので、実際の歩きの、まさにイメージトレーニングさながらです。

同時に、頭の中で、前記で設定した「大香ブランド老魂^{RouCon}サブタイトル」の世界と往来・アクセスしながら作業を並行します。この時は、想像と創造が溶け合って、いわゆるオンリーワンの世界が頭の中で広がります。とても楽しくなります。一度確定し終了処理を行った後で間違いに気づき、別のルートに変更一場所に依っては新旧の古道を紹介している書籍もある。——したくなる時が出て来ます。ここで強みを発揮するのが、デジタル処理された電子ルートならです。その確定ルートを電子格納庫から呼び出して自由自在に思い通りに編集出来ます。したがって、出発の直前まで何度も見直し、最終の確認作業を行います。パソコン上で確定した電子ルートのトレース結果の例示は図-13の通りで、私の自宅から里山「千歳山」へ行くルートをパソコン上で電子国土にトレースした、書き込んだ状況です。

計画の段階ではこの作業の時間が一番楽しくなります。先々「どんな風景が待っているのかなあ、どんな人達と巡り会えるのかなあ、どんなハプニングと遭遇するのかなあ、天候はどうなるのかなあ、どんな花が咲いているのかなあ、どんな難題を神仏から授かるのかなあ、何か悪魔のようなものが潜んでいないかなあ・・・」夢と一抹の不安が交錯するひととき
一時となります。



図-13

2. 電子ルートの転送・携行

上記パソコン上で描いた（トレースした）最終確認の希望計画ルートの電子データを、私が所持する図-14のガーミン社製の「^{注5} GPS 機オレゴン 450」（後に 650 に取替更新）に転送します。同オレゴン機にも同じく国土地理院の地形図（基本縮尺 2 万 5 千分の 1 で、表示は拡大・縮小可）を電子メモリ（マイクロ SD カード）に内蔵しており、その電子マップを見ると、同図のとおりで、パソコン上で確定・トレースした図-13 のルートがその儘表示されます。このような GPS 機器を「地図搭載 GPS 軌跡（緯度経度&タイム）スタンプ・グッズ」と私は別称しています。



図-14

3. 電子化の特徴点

電子ルートと言えば、カーナビが浮かんで来ます。あるいはインターネット上の各社が提供するマップがあります。これらでは既に路線（道）のデータが固定されております。ところが、パソコン上においては、歩きたい所に自由自在にルートを入れられます。例えば、道（登山道）のない山の峰々を繋いで新しい独自のルートを設定出来ます。3千メートル級の険しい山塊に立ち入る場合は別として、里山の道なき道を歩きたい、つまり、冒険遊びをしたいなどとなった場合は、思うが儘に新しいルートを設定して、同オレゴン機に転送して現地に携行出来るようになり、抜群の威力を発揮します。いわば、オンリーワン・ルート、オリジナル・ルートを設定出来るのです。現にこのようにして里山歩きを楽しんでいます。例えば、道がなく無雪期では立ち入る事が出来ない山岳地帯に、雪のある冬期間入りたいとなった場合、このような GPS 機器活用が大いに威力を発揮する事になります。雪上歩行では、ホワイトアウト—英語= whiteout は、雪や雲などによって視界が白一色となり、方向・高度・地形の起伏が識別不能となる現象で危険性は大きですが、この GPS 機器を携行すれば視界不良であってもルートを大きく外れるリスクは軽減される、皆無になります。

このような特徴点を歴史街道スルーハイクに活かすと、例えば、歴史の道調査報告書では^{注6}点線で記述されたルートも電子化して同オレゴン機（のメモリ）に格納出来るのです。現地は本当に歩けるかどうかは、その格納電子ルートのその地点の入り口に立って、現地で判断すれば良い事です。携行結果は、GPS 軌跡（緯度経度&タイム）スタンプにより、細部を確認すると、歩いたという科学的なデジタル証拠が一目瞭然となります。

^{注5} 大きさ横 5.8 cm×縦 11.4 cm×3.5 cm、重さ 192.7 g（電池を含む）、駆動電源は単三型 1.5V 乾電池 2 本である。

^{注6} 今（同報告書作成当時）は藪で歩けなくなった、あるいは廃道になった、崖崩れなどに対応する予防的措置として立ち入り禁止区域となっているなどの理由で推奨は出来ないが、古い資料等に基づき確証を得た昔からの古道の道筋を記載する場合は点線で表記している。

第六部 必携「七つのデジタル武器（七つ道具）」

トレイル実践に当っては、前記 GPS オレゴン機を合せて「七つ道具」と称するデジタル機器を保有し、現地に所持して行きます。これらの機器のデータはデジタルですから、パソコンに取り込み可です。一つのスルーハイクが終わると、帰宅後パソコンに向かい、それらの電子データをパソコンにダウンロード（取り込み）します。取り込んだ電子データはパソコンの中では、マイクロソフト社オフィスソフト、その他のソフトウェア、インターネット（自宅は光回線）と合わせてシームレスに相互連携出来ます。「七つのデジタル武器」とパソコンとの、いわば身の丈デジタルネットワーク（有線 LAN & 無線 LAN）を構築しています。

1. 「GPS 機（ガーミン社オレゴン 450）」――必携その 1

類似のものは他社も商品化していますが、携帯用ハンディ GPS ナビゲーターのトップシェアを誇る専門メーカー米国ガーミン社のものです。この活用については、前記「第五部 希望計画ルートの電子化」のとおりです。

2. 「Docomo スマートフォン（LG 社 Optimus Vu L-06D）」――必携その 2

使用目的は、インターネット上での宿泊先場所の検索・確認、天気予報確認、公共交通機関乗換案内検索、その他諸々の情報検索です。グーグルマップ上で立ち寄り希望する場所、周辺の宿（ビジネスホテル・旅館・民宿、テント泊敵地）を探すのにとっても便利です。

前記のとおり、当該「歴史街道」に係る事前収集の関連資料・情報は、ペーパーのままでは持参しません。冊子状のものであれば、裁断し、いわゆる「自炊」処理をして電子書籍（PDF・jpeg、その他）化します。全ての資料を自宅で電子化し、このスマホに格納します。あるいは、オンラインストレージサービス・クラウドストレージ（Dropbox、OneDrive、Google ドライブ、iCloud 等）に電子データを格納します。いわゆるペーパーレスの実践者です。したがって、宿泊先の情報に係る紙（ペーパー）資料も一切携行しません。

余談であるが、これまで、AU、ソフトバンク、ドコモの 3 大通信キャリアと契約して使ってみましたが、最悪はソフトバンクでした。電波カバー範囲（いわゆるサービスエリアの範囲）ではドコモに限ります。都市部では三社一様ですが、山間部に入るとソフトバンクはダメでした。

また、私が所持のスマホ（図―15 上）の最大の特徴は、雑誌や書籍などの 1 ページの縦横比に近付けた 4 対 3 の 5 インチ（1024×768 ドット）液晶ディスプレイ（丸ごと 1 ページ表示）であります。広い画面を活かして快適にアプリを利用出来ます。非常に使い勝手の良いスマホであります。

この 5 インチのものは、余り人気なかったような気がするが、私が以前所有した事のある 3 インチ大では文字が小さく、拡大すると今度は全体が見えなくなり、非常に使い難かったのです。また、7 インチ大では、大きさ・重さの点から、少しでも荷物の重さを軽くしたいロングトレイルには不向きであり所有するつもりはありません。（その後、HUAWEI X1 7.0 に更新しています。）



図―15

3. 「携帯電話 (Docomo)」——必携その3

誰でも持っているものですが、私は簡単ケータイの図—15下のもので、電話機能と電子メール機能に特化 (専用化) して使っています。同図上のスマートフォン一つに「電話・メール」「情報通信」「カメラ」機能を持っているので、本当は、わざわざ重いものを別々に持つ必要はないのですが、ある意図があります。それは、「電話・メール」「情報通信」「カメラ」を別々に持って、紛失あるいは故障時のリスク分散を図っているからです。リスク分散で浮かぶ一つに「三種の神器」です。ご承知のとおり、日本神話において、天孫降臨の時に、^{ににぎのみこと}瓊瓊杵尊が天照大神から授けられたと言う玉・鏡・剣の事で、それ以来日本の歴代天皇が継承して来た三種の宝物を言います。宮中には、勾玉の本体と、鏡と、剣はその形代が^{かたしろ}奉安されており、鏡の本体は伊勢神宮に、剣の本体は熱田神宮に奉安されているとの事です。その正しい意義・歴史価値はともかくとして、まさに結果的には「リスク分散」を図る様相になっています。

4. 「デジタルカメラ (Panasonic DMC—FT 3)」——必携その4

デジカメは誰もが所有・携帯する機器ですが、私は、①GPS ジオタグ (位置情報) 付き、②防水型、③パノラマ撮影可の3条件 (要素) を具備したものを携行しています。

物は図—16のとおりで、写真を1日当たり平均250枚前後、多い時は300枚ほどを撮影します。使用目的は、様々な状景のメモ記録用です。

GPS ジオタグ (位置情報) 付きですから、自宅に戻ってから、「カシミール3D (フリーソフト)」を起動し、国土地理院の地形図 (電子国土) 上で同期出来ます。すると撮影位置と撮影方向が特定され表示されます。また、やり方によっては、インターネット上のマップにも表示出来ます。ただ、前出同オレゴン機のようなGPS専用機ではないので、カメラの電源を入れてGPS衛星を捕捉するまで数十秒も掛るので瞬時性に欠けます。なお、同オレゴン機にはカメラ内蔵のものもあります。電子国土への撮影位置の表示について補足しておきます。デジタルカメラにGPS機能を保有していなくても、同オレゴン機のようなGPS機器を携行して軌跡を記録すれば、「カシミール3D (フリーソフト)」上の国土地理院の地形図 (電子国土) に於いては、デジカメ撮影時刻とGPS機時刻を同期して撮影位置を推定し表示してくれます。

ところで、あらためて静止画写真を考えて見ると、現時の一瞬の記録ですが、時間経過後に見ると、時間・空間・時代を超えて、過去の再現という表現も出来ようかと思えます。いわば時空超越再現グッズというところでしょうか。

5. 「IC (ボイス) レコーダー (オリンパス製)」——必携その5

歩いていると頭の中に様々な事が浮かんで来ます。普段・日常生活では見られない生活様式や面白い・珍しい状景に接します。そうした時のために図—17のものを携行し、^{こえ}ボイスでメモ的に記録します。また、様々な人達との会話・交流が発生します。初耳の様々な言葉が飛び交いますので、記録に留めたいキーワードを即座に声で吹き込み記録します。また、デジタルカメラによる撮影時の補完として説明を声で記録しておきます。さら



図—16



図—17

に、後記するが、同オレゴン機で「ウェイポイント」を設定出来ます。その時の状況も録音しておきます。いずれも録音時刻がタイムストップされます。いわば、備忘録メモ用として使っているのです、自宅に戻ってからの報告資料作成時に大活躍します。

スマホ・携帯電話にも同様の機能はありますが、即時性ではこちらが優位であります。ワタタッチボタンで即時に録音出来ます。大きさは 3.5 cm×10 cm×1.5 cmで軽量です。

6. 「充電器と予備の SD カード」――必携その 6

GPS 同オレゴン機、スマートフォン、携帯電話、デジタルカメラ、IC レコーダーのデジタル機器を携行する分、それらの駆動電源（図-18）が必要となり、いわゆる充電器（図-19 左）を持参する必要があります。宿（ビジネスホテル、旅館、民宿）泊まりでは 100V 電源があります。

デジカメは、記録用として、多い時は 1 日平均 250 枚程度撮りますので、記録媒体破損時のリスク回避も考慮し、図-19 右の通りの予備の記憶媒体 SD カード（32 GB）を持参します。なお、デジカメ本体には 64GB の SD カードを入れています。



図-18

7. 「携帯ラジオ（ソニー製）」――必携その 7

図-21 のとおりで、私の携帯理由は、一般的な暇潰しのために聞く事はありません。あくまでも災害時や非常時などに於ける



図-20

情報収集のためであります。したがって、持参するものの実際に使用した事はまだ一度もありません。単四電池 2 本で動作するものです。



図-19

8. 「背負い携行型太陽光電池パネル（アメリカ製）」――その他

必携では無いが、必要に応じて持参します。山小屋泊やテント泊等では、それらデジタル機器の電源をどこから補充するのが大きなネックとなります。宿泊りと割り切っている場合は、持参しないが、山小屋泊、数泊以上のテント泊も取り入れる事になれば「背負い携行型太陽光電池パネル」（図-21）を持参します。500g ほどの重さが加算なるものの、デジタル機器の電源がなくなるのが最悪なので、そのような宿泊形態の場合は持参します。本品は、アウトドア・ロングトレイル先進国アメリカ製です。きちんと充電されます。他の人の使用レポートなどを見ると、高効率の部類に入ります。



図-21

(メモ)

スマートフォンにも GPS 機能が付加されており、前出オレゴン機のような GPS 専用機を携行しなくともよいが、駆動電源は 100V 充電となり、どこでも手に入る単三電池が使えない。ところが、手持ち現有のオレゴン 650 機は単三電池で駆動し、かつ充電機能内蔵であり、非常に使い勝手が良いものです。

しかし、予備充電機を持てばスマートフォンも実用に耐えるもの、思案するところあり。

1. 抜群の使い勝手

いよいよスルーハイク実践では、前記希望計画ルート²²の電子データ（電子ルート）を転送・格納したGPS同オレゴン機、ならびに前記デジタル機器を携行します。同オレゴン機はもちろん防水タイプです。

同機を携行している姿は図-22のとおりで、ストラップで首からぶら下がっています。図-23は、同機の電子マップに格納されている計画ルート（緑色）と、記録された実践ルート（赤色）の皇居付近の事例です。

カーナビと同じGPS機能を保有している事から、自分の立っている現在位置も表示されるので、計画ルートと現在位置の相対の位置関係が直視出来ます。万が一計画ルートから外れたとしても、どちらの方角にどれほど離れたか即座に判断可能なので、歩行位置を簡単に修正出来ます。カーナビ、スマートフォンでは声（発声音）あるいは矢印表示で誘導案内します。同オレゴン機にも同様の機能を保有しているが、電池消耗が激しくなる事から停止させて、ルートの線（ライン）のみを表示させています。

同時に本機は、歩行した結果軌跡、つまり、緯度・経度の位置とタイムを電子データで自動記録・自動保存しています。記録頻度は「自動」、記録間隔は「標準」に設定しています。実際に歩いたと言う電子的証拠を記録・保存する事にも大きな携行意義があります。例えば、「旧東海道」トレイルでは、男二人連れ、夫婦連れ、単独行の7組くらいの人達と出会いました。いずれも紙地図を持参した歩きで、街中

では地図と睨めっこで人に尋ねたり、交差点・分岐点では右往左往する姿がありました。真のルート（道筋）を歩いているのか、と余計な心配事が湧いて来ました。ある人は「途中で道を間違い、かなりロスしたなあ」と述懐・自己弁護する人もいました。

その点、ガーミン社GPS同オレゴン機を携行する私は、前述のとおりで、自宅で綿密に設定した希望計画ルートを電子データで持参しており、そんな心配は一切無用であります。

ぼうっとして分岐点で別の道に行く事はあるものの、それは計画ルートの確認ミスであって、いわゆる



図-22



図-23

歩くべき分岐で迷う・悩む・人に尋ねると言う事は殆どありません。道筋を尋ねる行為は、時間のロスのみならずストレスを溜める要因となります。なお、ペーパー資料を携行するにしても、大事なものは「国土地理院の地形図」を持参する事が大事です。絵柄表現の観光用パンフレットは眺めるのには楽しいが、実際に歩く道筋の線を確定する事は不可能であります。「尋ねる」と言う行為を利用して地元の人との交流に繋げるチャンスと捉えている、と言う方が必ずやいます。私からは「強がり」としか映りませんが。まあ、それも有りという側面もあるので、それはそれとして認めましょう。人は判断し難い分岐点ではその近くの民家等に尋ねるものです。自分は1回限りなのかもしれないが、その家にとっては、「いろいろな人が来るなあ、不愉快だ、迷惑だ」と思う人もいると思います。そう言う他人の心境も^{おもんぼか}慮る必要があると思います。

ペーパー地図持参と同オレゴン機携行の行動時の比較では、特に雨降りの場合に、得失に大きな差異が生じます。当然であるが雨降りの場合は、簡単にはペーパー地図を広げられません。カラー印刷物は色が滲んでしまいます。ビニールケースに入れたとしても、表面の水滴でとても見難くなります。つまり無用の長物と化します。ましてや雨降りの日に、尋ねられた地元の人は大迷惑を蒙ります。その点、防水仕様の同オレゴン機は心配無用です。また、山間部では、地形図に表示されていない林道、作業道、山菜道、獣道などが縦横無尽に交錯しており、周囲に民家が無く聞けないのが普通です、例えば民家がある所であっても日中は留守が多いのです。したがって「尋ねる」事の効用は期待出来ません。同効用を主張する強弁は机上の空理空論なのです。

別の視点から言うと、私は歩くルートを確認するための地図は一切持参しません。また、当該「歴史街道」に紙の関連資料は持参しません。前出したとおり全て電子化しペーパーレスです。同オレゴン機を携行するもう一つの側面があります。私の場合、歩く時には、図-22のとおりダブルストック方式、別称ノルデックウォーキングスタイルを取っています。両手が塞がっている事から普通の姿では紙地図を持ってない状態になっています。

さて、同オレゴン機のもう一つの大きな利点として、「ウェイポイント（ルート上の地点情報）」を自由に設定出来る事があります。

図-24は、吾が地元山形市平清水地内の大日寺跡地の実際の踏査ルートとウェイポイントマーク（四角のマス状表記）です。特記すべき重要な地点を現地ではボタン一つで登録出来ます。それには番号が自動付定され、任意の名称付定も可能であり、前記ICレコーダーにより声で注釈的に記録しておけば、後の自宅に帰ってからの整理にはとても都合が良いのです。

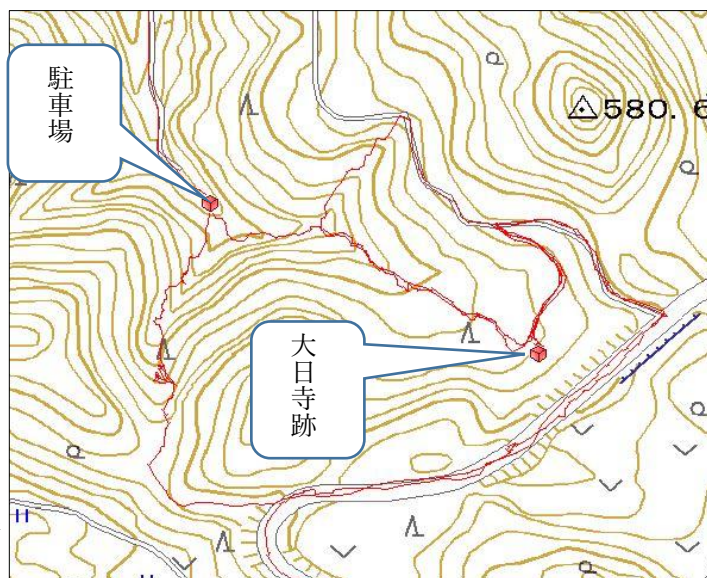


図-24

2. 現地との乖離

同オレゴン機で電子ルートを携行すれば、万事OKかと言うとそうでも無く、一方で、次のような問題もあります。「歴史の道調査報告書」や書籍に掲載のルートが、国土地理院の縮尺5万分の1地形図に記載したものであっても、図面上1cmのずれは現地では500mのずれに、0.5cm（5mm）のずれは現地では250mのずれとなります。縮尺2万5千分の1地形図でもその半分の1cmは250m、125mとなります。ま

た、2万5千分の1地形図でも1mmは25m相当です、0.2mm（線として表示出来る最小太さ）は5m相当ですから、逆に言うと5m程度よりも道幅が狭ければ地形図には表れないと思った方が良いでしょう。また、それよりも幅が広くても生活に関係しない林道等は表示されない例が多々あります。国土地理院地形図に記載されていない道が沢山あると言う事です。

逆に、観光パンフレットなどでは、その歴史街道を強調するあまり太い線で書き込んでおり、それ相当の幅広い立派な道路なのかなあと思ひ、現地に行って戸惑う事もあります。同パンフは縮尺を適用していないので使い物にならないのは当然として、反って迷いの要因を作るようなものになります。

したがって、前述したパソコン画面上でのルート設定作業において、いくら忠実にトレースしたつもりでも、それは同地形図に表示されている道のみをなぞっていると言う事です。地形図上に表記されていないが、現地では歩けるかもしれない正確な古道の道筋は現地判断する他はないのです。

歴史街道の整備に熱心な地域に行くと、現地には、分岐点に「こちら」と言う藪の山道へ誘導する案内表示板・案内標識・道標が設置されている場合もあります。つまり、同地形図に表れていない歴史街道・古道の道筋が沢山あります。なお、これらは、地元の保存会などの有氏の善意で整備している場合が殆どですが、当てにならない場合もあります。

現地に立てば国土地理院の地図には表示出来ない細い裏道や林道、生活道が縦横無尽に交差しています。ましてや観光マップには表示していない道は沢山あります。具体的なイメージを図-25で説明します。同地形図上には外（上）側の太い線の道が記載され、内（下）側の細い裏道は記載されていないとし

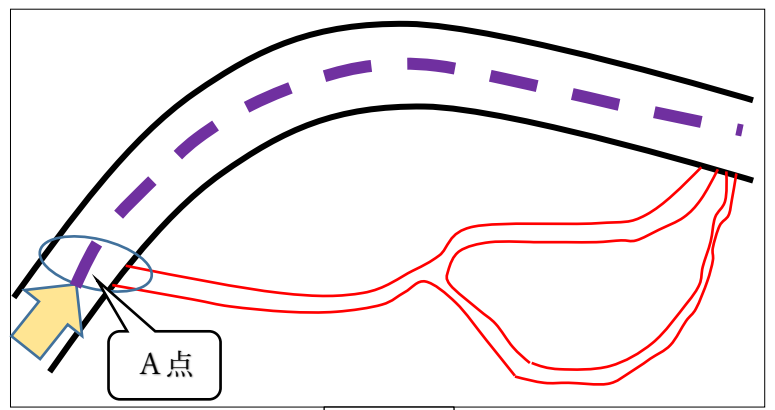


図-25

ます。携行している計画電子ルートは太い線（紫色の点線）の道です。ところが現地に行き、A点で右へ

通じる道も現れ分岐点に差し掛かりました。その右手の方をちょっと覗くとくねくねした道で建物も木造の古いものがあちこちに散見されます。真っ直ぐ行く大きな道路は明らかに明治以降に開通した車道であり、「歴史街道・古道」ではないと判断出来ます。どうするか。分岐点には案内表示・道標等はないが、「歴史街道・古道」は右への道だと判断し、そちらに歩を進める事とします。

図-26の黒色の太い実線は計画ルートで、赤の細かい実線は実際に歩いた同オレゴン機の歩行軌跡です。現地では、同図「ここ」の地点に「旧塩の道」のルートへと誘導する案内標識がありましたが、国土地理院地形図上には道路記号の表示はありません。このような事から国土地理院の地形図（電子国土）も万能ではなく、道を表示するには限界があるの

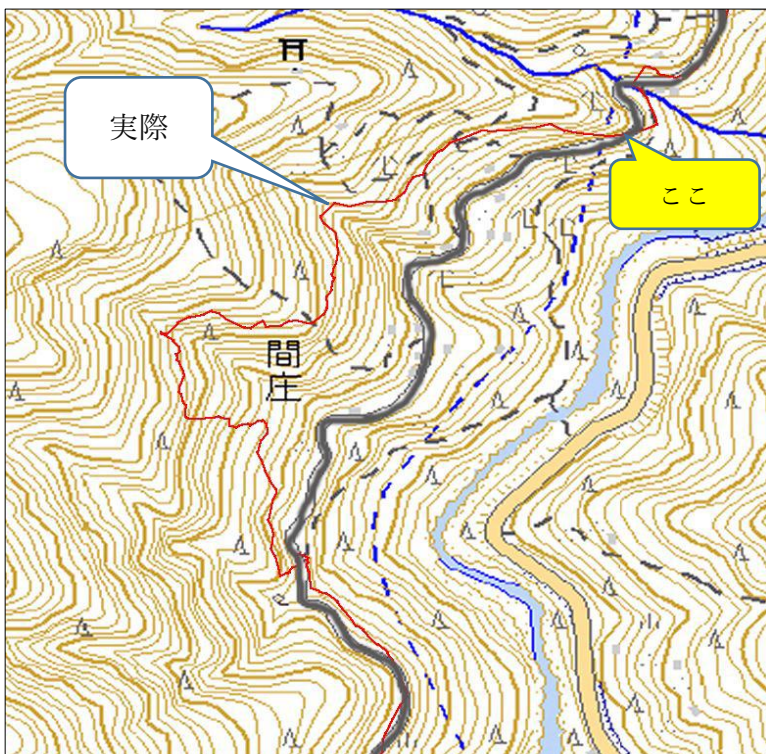


図-26

です。そこで、現地に立った時は、同オレゴン機の表示と、それらの現地標識、周囲の状況を見極めながら、総合的に判断し、旧街道・古道の道筋により正確に乗るように、両眼の指向アンテナを360度回転させながら、周囲への注意力・観察力を高めて歩行します。現地には「飛耳長目」の感性が問われる場面が多々発生します。あるいは、現地に国土地理院地形図にないルートのご案内標識があった場合、「そちらには行かない」と頑固な姿勢でいると、せっかくの本物の古道を体験せずじやないの舗装道路を歩く羽目になります。逆に、現地の案内標識を頼り過ぎると、向きが変わっていたりして間違った道に誘導されたりするので。両方共私が経験しています。

図-27の赤い(明瞭な)実線は、吾が地元、瀧山大滝ルート実歩行時のGPS軌跡(電子ルート)です。同図上の点線は紙の地形図に表示されている登山道(山道)です。矢印の所は地形図上の山道ルートと数十メートルのずれが生じています。GPS機器側の受信状態とか、機器本体に誤差があるという精度の問題も考えられますが、一方、国土地理院側の道に係る記号の書き込みの精度の問題もあります。どっちにしても、ペーパー地形図もGPS機器も万能では無いと言う事です。



図-27

重複するが敢えて記述します。山深い険しい山岳登山や冬期のGPS機持参必要性は分るが、それ以外の旧街道歩きでは必要ないだろうと言う見方があります。しかし、現地に於いては、地図に記載されない道が沢山交差しています。地形図作成時点と、歩く時点には時間差が生じます。時間差に伴い道路事情(交差個所の変更、雑木繁茂に依る藪化、廃道化等)が変化します。もう一つ、縮尺との関係で地形図に表示しきれない道が沢山交差しています。したがって、同機の持参は交差・分岐点に於ける適切な道の選択判断に有効な手段・ツールであります。

いずれにしても、世の中万事は陰陽二気で、どっちにしても憤慨する気持ちにはなりません。迷うような地点に出向いたのはこの私の判断ですから。全ては私の自己責任に帰結、です。

3. 古道の山道に拘る理由

東海道の全ルートを掲載し解説した書籍に「東海道を歩く旅」(山と溪谷社発行)があります。ルートの記載としては分かり易い方です。この本の冒頭に次のように書かれています。「・・・(道が)消えてしまったり、変わったりする部分もあります。その場合は研究目的でもない限り、無理して忠実に辿ろうとするより、脇道を選ぶなりして、少しでも快適に、安全に歩く事をお勧めします。・・・」

しかし、私は、前記のとおり、様々な資料を駆使して、希望計画ルートを電子化し、携行する事で、少々無理・困難を覚悟し、旧街道・古道、すなわち、昔々から歩かれて来た古い山道のルートを忠実に辿る事に拘り、強い執着を持っています。それは、後記「第八部 中行程(歩きの最中)の楽しみ」のとおり、生活のために、生きるために必要不可欠の道だったのです。廃道になった、まったく消滅してしまっただけのルートはありますが、「歴史の道 調査報告書」には、歴史に造詣の深い人達が、お金と時間を掛けて、調べ上げた旧街道・古道のルート(実線または点線で表記)を掲載しているのです。そのような貴重な歴史の道を歩くと覚悟したからには、現地に於いては、途中から草木の藪が次第に濃くなって、踏み跡が薄れ道筋が不明瞭になったとしても計画ルートを邁進して行きます。入り口から完全に塞がっているような藪に突き当たったとしても、計画したからにはまっしぐらに突入して行きます。なぜそれが可能か

と言うと、同 GPS オレゴン機に電子ルートを携行すればこそその為せる業なのです。藪の道に踏み入れるとそう言う所は両側から背丈を超える樹木が覆い被さり、目視の見通しが利かなくなります。それはすなわち方向を見失う事に直結します。つまり、出口の方向が掴み難くなりますが、同オレゴン機に表示される電子ルートのお蔭で絶対に迷う事はないのです。見えない先を観る事が出来ます。

なぜこんな冒険をするのか、無理をするのか、大きな二つの理由があります。

- ☑ 一つ目は、旧街道・古道には、人知れず佇んでいる石仏、道しるべ等の石碑、小さなお社・祠、住居・耕作の跡地と思われる人工的な石垣などに出会える期待感があるからです。出合えたら自分にとっての新発見です。未知の世界を切り開いたと言う感がするのです。児童・幼児期の冒険心そのものです。冒険心に従順になるだけです。
- ☑ 二つ目は、道が藪化しているから、不明瞭になったから引き返す事にしようとして、向きを変えて数歩進む（退歩する）と、何か罰でも当たるような薄気味悪い気持ちになります。計画ルートを忠実に辿ろうとする強い決意がある中で、その決意に反する行動を取ろうとすると、いかにも安直・簡単に方針を変更して良いのかと言う反動精神が興るのだと思います。なお、これまで何回か藪の壁に当たりましたが、逃げて予定外の車道を大きく迂回した事は一度もありません。もしも、逃げていれば、おそらく悔いが残って、後悔・自責の念がいつまでも消えないと思います。

総じて言えば、冒険心と共にルートファイティングの醍醐味を味わいたい欲求があるからです。冬の雪上スノートレッキングに依るルートファイティングの状況と共通します。

さらには、歴史街道は現実的には歩く人が少ない中で、地元の人達の見回り点検・補修で歩けるようになっています。歩く人が少なく放置すれば暫時藪化します。「維持の要諦は歩く事」なのです。したがって、私一人でも歩く事は、陰で苦勞している人達に対して、恩返し、感謝の表し方だと思っています。休憩などで地元の人達と懇談すると必ずこのような話題が出ます。とにかく、こっちに来て歩いて欲しい、歩いて貰うと嬉しい、と話されます。

4. ファクト（事実）とエビデンス（証拠）

猪瀬前東京都知事は、自らの5千万円受領問題で辞任し、2013（平成25）年24日（火）退任しました。彼が口癖にしていた言葉が「ファクト（事実）とエビデンス（証拠）」です。

このキーワードは人付き合いに係る言動にとっても至言だと思います。つまり、他人の是非・善悪を追究する時は、この二つのキーワード「ファクト（事実）とエビデンス（証拠）」の裏打ちがなければ、人を批評する資格はありません。私情に任せた怨恨まがいの当て付けでは人に非ずです。

（1）GPS 同オレゴン機の携行

このキーワードに繋がるのが「歴史街道」スルーハイクを実証する前記のガーミン社 GPS 同オレゴン機の携行です。同機に電子記録される通過点の「緯度・経度と時刻」が歩いたと言う客観性を強力に担保する事になります。また同機には時計や緯度経度の補正ボタン類はない事です。つまり、同機が記録したタイム（時刻）と位置（緯度経度）を使用者が意図的に・恣意的に調整出来ないのです。そのタイム&位置は GPS 衛星から発せられた電子スタンプなのです。同オレゴン機はまさに「ファクト&エビデンス」を保証する科学ツールなのです。

私は長年の会社人生現役時代に於いては、何かにとあらゆる場面で「その根拠は？ エビデンスを出せ！」と問い掛けられて来ました。つまり、私が従事して来た仕事には感覚的な物言い、客観的根拠のない発言・文書は許されなかったのです。したがって、他人様が何かを話す時、滔々と得意げに語るほど、

その内容の客観的根拠を持っているのか？ と内心は疑義を呈する性格となっています。そういう体験・見方や価値観があって、一連の歴史街道スルーハイクでは、そこを歩いたと言う現実に即した電子記録を持ちたく、GPS 機器を常時携帯するようになったのです。

(2) デジカメ写真の撮影日時

デジタルカメラで撮影した写真をパソコン上で、写真にマウスを置いて、「右クリック－詳細－撮影日時」のタブ選択で、撮影した証拠となる日時を確認出来ます。

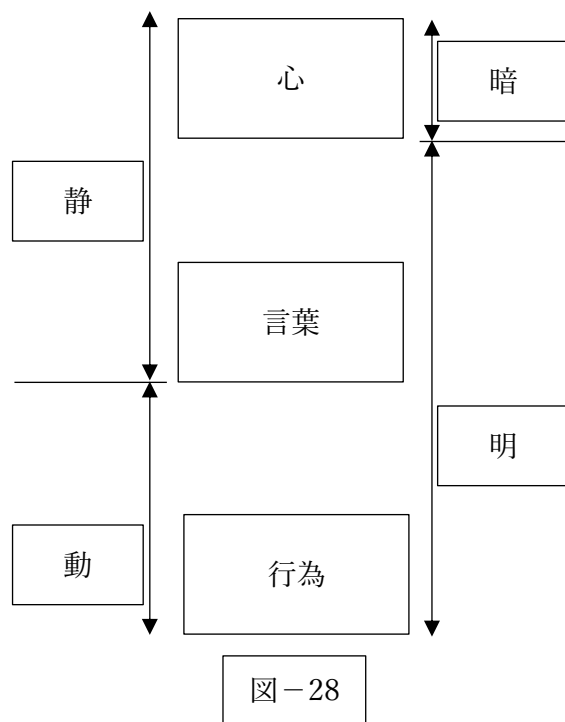
(3) 領収書の保存

宿泊先の領収書を必ず貰い、宿泊した証拠としてきちんと整理し保存しています。

第八部 中行程（歩きの最中）の楽しみ

私は、日々喜怒哀楽に乱高下し、一喜一憂の人生を送る時、纏めて言葉で表せと言われると、自分の事では「好奇心は永遠に不滅」、他人様を含めると「人間みんな小説家・シナリオライター」と思っています。私の言動に係る社会との繋がりでは「(大沼という) 固有種の直播作戦」と自称しています。

小峰彌彦氏はその著書「曼荼羅の見方 (大法輪閣)」の中で「曼荼羅は、心、言葉、行為の三視点に依る」と述べています。私は、それに陰陽の要素を絡めて遊び心の感覚で図化すると図-28のとおりになります。これに触発されて、文法を無視した響きによる言葉遊びですが、「心・言・行」を串刺しし、「クリエイティビリティ・レイヤー作業」(好奇心・ひらめきを重層化する遊び)、「心物(←→神仏) 往来シンクロナイズド作業」(異体相互を往来し同期化を図る遊び)を起動して、身の回りの出来事を創作して楽しんでおります。歩き旅では計画時から寄り道を設定する場合もあるが、それは僅かであって、浮き上がる六根(感覚や意識を生ずる六つの根元、眼・耳・鼻・舌・身・意の総称)の気儘に任せて楽しみます。このような人生観のスクリーンを通して、歩き旅の道中に感知する万般に、悲喜交々の心を以って右往左往します。そのような歩き旅道中の心模様を次の切り口で整理して見ました。



1. 旧街道を辿りながら昔(過去)と今(現在)のレイヤー作業

旧街道・古道とは言え、明治以降の国土開発により、次第に整備・拡張され、舗装・車道化された所が殆どです。今は公共交通道路と重なっているのです。例えば「旧東海道」は国道1号線の道筋であり、「旧奥州道中」は国道4号線と重なっている所が殆どです。しかし、一部に車が通れない、人でさえもやっと通れる幅1m未満の古道そのものが残っており、それも峠を越える所、つまり、トンネル通過ではなく峠を越える道筋が残っているのです。急峻な山道で登山道になっているルートもあります。環境省が整備した長距離自然歩道とも重なっているルートもあります。都市部に入っても、今は、下町の生活道路の一部となっているものの、くねくねと曲がった道筋は昔そのものを彷彿させる所もあります。

頭の中を、昔の事を想像した思考層と今のこの時の感情層を積層構造にして歩くのです。「歴史街道(旧街道・古道)」は、古来より様々な身分の人達が行き交った道であります。「参勤交代で通った○○藩のお殿様もこのような風景を見たのだろうか、こんな急坂ではお殿様は籠を降りて歩いたのだろうか、お姫様の着物の裾の切れ端が落ちていないだろうか」などと想像しながら歩きます。天皇・皇族、貴族・公家方が、あるいはお殿様(藩主)、その家臣が、兆民が、御姫様が歩いた道です。明治の先駆けに明治天皇が全国行幸の折に通った道です。「交易・物流の道、軍馬の道、信仰の道」です。この道に今代の私が足跡を重ねて行く、デジタル風に言えば上書きして歩くと言う思いを持つと、「悠久レイヤー」と「現代レイヤー」を行き来き、橋渡しをしているようで、とてもロマンを感じ愉快的気分になります。図-29aは和田峠の古道です。



図-29a

歩いていると、谷間の河川・溪谷に落ち込む急傾斜地に、へばりつくように民家が点在する所もあります。まさに秘境の雰囲気があり、眺めは、良く言われる日本の原風景そのものでとても素晴らしいのです。しかしはっきり言って山奥です。そんな所に限界集落・過疎集落があったり、廃屋があったり、建物が撤去されて礎石・土台のみが残っているものなど、時代の趨勢すうせい ほんろうに翻弄された人々の存在にも思いが飛んで行きます。しかし、今も歴史街道に沿うように人々が住む民家・集落が残り、そこに祖先の歴史を重ねて来た人達が暮らしている事を思うと感傷に捉われます。集落には小さな寺社・お堂が沢山あって、廃れつつあると云いながらも伝統の祭りを継承している所に出くわし

たりもします。なお、市街地ですが図-29bは小田原駅前前の例大祭神輿祭りに出合いました。寄付を頂いた家の玄関に向かって、雄叫びを挙げながら勢い良く駆け寄る面白い祭りでした。つまり、福の神を運んだのだらうと思いました。

さらには、行政が力を入れて、助成金を拠出し、江戸時代を象徴する宿場の出桁造りの建物が並ぶ状態を保存している地域もあります。今様の「地域興し」「観光開発」であります。時々刻々と変化する眼前の風景、多種多様な植生、遠くの山並みの眺望・風景の変化に見とれて歩いていると、その地域の歴史の重みに心が奪われて行きます。眼前に表れるあらゆる物事が未知との出会い、新しい発見と言う気持ちになります。

古道を辿りながら四方八方に眼を投じつつ歩いていると、昔の不易と今の流行が並流する風情・佇まいに癒される気分になります。



図-29b

2. 神社（社殿）・寺院（仏閣）・石碑等との対面

古道・旧街道沿いには、大中小、多くの神社や寺院、祠堂しどう、お堂・堂宇やしろ、お社があります。それらの境内に、そして街道沿いには多くの石仏・野仏・石塔・石碑・板碑、庚申塔、供養塔、お地藏様、月待塔、道祖神、馬頭観音、常夜灯などが奉られて佇んでいます。これらは、この滝山地区の地元にも沢山あり、珍しいものではありません。しかし、山形県を離れて行くと、明治維新政府の神仏分離施策に抵抗して生き残ってきた「神仏習合」「神仏混淆」「神仏和合」「神仏併存」を剥き出しにしたような雰囲気の寺社があったり、山岳信仰・修験道の名残で、敷地内には行者の沢山の霊人碑が建立した遙拝所ようはいがあったりします。図-30a上は信州に多い夫婦の道祖神です。同図bは今も市街地道路沿いに残っている常夜灯です。常夜灯は吾が山形県とその周辺では寺社の境内に設置されている事が多いが、関東以西に行くと、今も公道敷地内に設置されてい



図-30a

る所がとても多いのです。これらに接し強く思う事は、明治の神仏分離（判然）令は末端では廃仏毀釈に曲解されて、神社から仏教色のあるものは悉くことごと廃棄された所があったと云われています。そうした中で秘密裏に仏像などを持ち出して守ったと言う話をあちらこちらで見聞きしました。うれしくなります。

路傍に佇む歴史的石造物は「たかが石」であります。明治以降の、特に戦後の国土開発の過程で「邪魔だ」と廃却すればそれまでだったのです。中には心無い工事過程で、廃棄もあったと思うが、「たかが石」にも光を当てて、きっちりと守り通した人々がいた事実をあちこちで聞かされました。

前記したが「旧中山道、旧塩の道（秋葉古道）」トレイルで気付いたのが、信州（長野県）地方には兎に角「双体道祖神」が多い事です。そこで何人かに、「この地方では、夫婦、兄弟姉妹、はたまた隣近所の間柄は皆仲が良いのでしょうか」と話したら、「そんな事は無い！」という事で大笑いの連発で終わりました。つまり、愛睦まじく暮らしたいと言う願望の表れであると理解した次第でした。裏を返せば、実は喧嘩が絶えない、不仲が多いという事なのか？

このような石碑・石塔類は、たかが石ではあるが、ただの石ではない、意思・意志の詰まった石と捉える事が重要であると思っています。石の建立はすなわち、一つの神社あるいは寺院と同等の営みを凝縮し造立したものであると理解しています。失われたものがあったにせよ、長年の自然の猛威・風雪に耐えて厳然・凜然と立ち尽くしているものが沢山あります。このようなものに対面・対峙していると仏の法眼力と神の神通力を肌で感じる思いがします。

もう一つ、思う事があります。大きな神社・寺院の境内の殆ど、あるいは小さなお社・お堂のある場所も「杜」^{もり}を形成しているという事です。ケヤキ・桜・银杏等の落葉広葉樹、松・杉・ヒバ等の常緑針葉樹の大木・古木があってまさに「杜=鎮守の森」となっています。古代より、樹木が繁茂する山（森）には神が降臨し、神仏が宿ると言う信仰があったので、里では大木の繁る杜を山に見立てたのです。森の中の木・石・磐などを神の依代としたのです。境内には神仏がお住まいですから、伐採は厳禁なのです。したがって年月を経て大木・古木となります。歩いていて、遠くから見て、こんもりと茂った小高い木立の所には殆ど社寺が建っています。図一31は吾が町内会上桜田村社の月山神社ですが、この境内も立派な杜を形成しています。

それらは取りも直さず地元の人々が心を砕いて来たからこそ残存しているのです。その地域の人達の熱い信仰心・敬神の心があるからこそ守られて来たのです。地域の人々の生活リズムと四季折々の風習が融合し、冠婚葬祭と寺社の行事と信仰心が結び付き人々の生活を豊かにして来た証となるものです。もう少し高みから眺めると、神社・寺院の数が非常に多いと実感します。数もさることながら、神社について見れば八百万の神が祀られています。一つの神社（神道）に合祀と称して複数の神が祀られています。寺院（仏教）であれば様々な仏様の仲間「十方諸仏」が祀られています。一つの寺院でも複数の仏像が祀られています。



図-30b

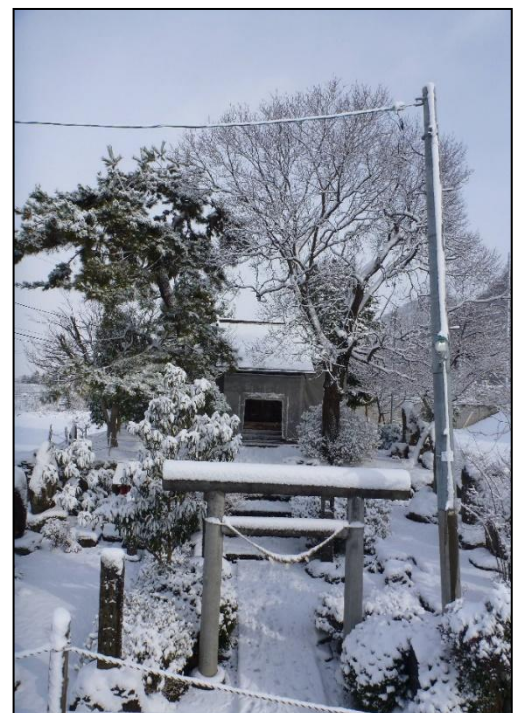


図-31

それらを見る付け、明治の「知の巨人」と称された南方熊楠の行動——神社合祀反対を訴え、騒動を起こし収監された体験を持つ——が浮かんで来ます。

一神教世界の民族・国家では考えられない事だと思えます。絶対に受容が許されない行為だと思えます。一部の過激な宗派には「アラーの他に神はなし」などと豪語する処があるようです。これらから、日本人の信仰の厚さと心の豊かさ、大和民族足る柔軟性・包容力の表れを感じ、悠久から連綿と流れる西郷隆盛の言う「敬天愛人」のこころや夏目漱石自身の言葉である「則天去私」に思いを致し、美しい日本の心の原風景に溶け込む心境に駆られます。

自分の内面の事であるが「第一部 プロローグ 1. 歴史街道スルーハイクに魅せられた動機と過程」に記述したが、神仏（神社・仏閣）に接すれば、自分の充実した人生のための何かヒントを貰えるのではないかと言う淡い意図もあります。要所で会って来た神主・住職からは学者風の立派な回答があります。神主は神職と云われ、住職に関すれば聖徳太子は十七条憲法で「仏・法・僧の三宝を篤く敬へ」と持ち上げられています。両者とも素晴らしい講話・演説を打ち上げる人が多いが、しからばそのとおり私生活で実践しているのかといつも疑問があります。『傲慢』の二文字を背負う〇〇議員と称される人達もそうですが、言葉で美辞麗句を並べるのは簡単です。そのような人達の私生活に於いては甚だ疑問を感じる処があります。有言実行出来ない人は胡散臭うさんいと思っています。心芯・心底からは信用出来ません。結局は自分の人生指針・人生道は自分で切り拓いて行く他はないという事を痛切に思い知らされる歩き旅です。

寺社の参拝儀礼たる合掌・柏手かしわでの所作の事です。無病息災、開運成就、家内安全、商売繁盛、合格祈願、身体健吾、心願成就、延命長寿などの四文字祈願言葉は沢山ありますが、それを直接的に心で唱える、声に出す、懇請する事はありません。お守りやお札類は、記念品として買う時がありますが、いわゆる偶像崇拜的に心を神仏に信託する事はありません。直接的な現世利益に期待する、あるいは求めるという事ありません。であるけれども神仏には会いたくなるというか、神社仏閣はその建造物もとは固より、祭壇の像仏や境内の雰囲気が大好きなのです。吾が心に不思議さを感じる今日この頃です。

3. 地域の人々との会話・放談・交流

一見し、同じ旧街道・古道歩きの姿をしている人達と出会った時は積極的に声掛けをします。男女の様々な組み合わせの連れがあります。男女それぞれの一人歩きから、夫婦連れ、グループと行き交います。情報交換や情報共有の場となります。これは当然の事としても、時には、作業・仕事をしている現地の人に、「こんにちは、何しているの？」と大きな声を掛け、積極的に会話を求めます。すると、「あんたどこから来たのか？」と質問されます。「どことは？」

- ①私の住まいの場所か
- ②昨晚泊まった処か
- ③それとも歩いて来たスタートの場所か

どっちを聞きたいの、三者択一で大学入試より難しいぞ？」と返します。すると殆どの方は「あなたの住まいよ」となりますから、「東京は六本木生まれで、新宿育ち、歌舞伎町で仕事もした時があるよ！」と言うが、ずうずう弁でそれはないだろう、となって、まずは場が白けます！ 時には、「このずうずう弁からどこだと思う？」と逆質問します。

会話が発展し、それぞれの地元の名所・史跡や図—32のような特産物など、山の幸・海の幸、吾が郷土のお国自慢の交換・キャッチボールの場、PR合戦へと広がって行きます。私は吾が山形県を自慢する時は、食べ物ではサクランボ（佐藤錦）、ラフランス、お米のつや姫、日本そば・ラーメンを、観光地としては山寺、出羽三山、蔵王のお釜を、そして百名山の鳥海山、月山、朝日岳、蔵王山、飯豊山、吾妻山を



図-32

取り上げてPRします。いわば、自称臨時観光大使になり切って対応します。

また、私の歩き旅に強い関心を持ってくれる人が沢山現れます。ダブルストック・スタイルに興味を示す人も時々現れます。お互いの夢や希望の交換の場に発展し、会話が弾みます。お互いの人生観の披露の場に進展して行きます。初めてお会いした人とは思えないくらい心を清純にして語り合います。とても、清々しい嬉しい気分になって、お互いの健康と安全に気遣いながらお別れします。

時には、先方から「このような素晴らしい神社・お寺があるので、是非とも寄って見て行ってね!」「〇〇と言うとても美味しい食べ物・名産があるので食べてね。お土産にしてね!」などと色々と勧められます。断る理由はないので、「分ったよ、ありがと

う」と元気の良い返事をします。ある一面社交辞令・外交辞令? 歩くうちにその推奨された場所に近づいて行きます。「立ち寄ると、時間を浪費するなあ! 投宿時刻が予定よりも遅くなるなあ! 立ち寄らないでこのままスルー(パス)しようかなあ!」などと雑念が邪魔します。しかし、私の中に居候しているもう一人が怒ります「嘘ついちやいけない!」とたしなめるのです。そこで、紹介・勧められた寺社については、必ずといって良いくらい立ち寄り・拝観を実行します。ただし、食べ物は、その時の気分で対応します。

また、子供達・学生など若い人達との会話にもタイミングを計ります。小学生には、「この道を昔何と行ったか知っているか?」、「地元の自慢のものは何?」、「通学時間はどのくらい?」と声を掛けます。中学・高校生に対しては「どんな仕事に就きたいの?」などと人生観・人生の在り方について問題提起を仕掛けて、会話の交流を図っています。さらに、ホテルのフロントの人達との会話もとても楽しいものがあります。変わった処では、警察官にも「この辺は交通マナーが良いね、あるいは悪いねとか、物騒な世の中だね、治安維持・確保よろしくね、ご苦労様」などの声を掛けます。写真を取って貰った事も何回かありました。皆気さくです。多くの他人様ひとの誠意や情愛に触れて福德果報を沢山頂戴した気分になります。

4. 山の果実の恵みに感謝

「歴史街道」トレイルは、春から晩秋に掛けて行っています。冬季間は歩きません。夏から秋に掛けて、野山の木々は実りの果実を付けます。大自然の中で生育した果実は、太陽の光と大地の水・養分の恵みを受けて、独特の渋みと甘酸っぱい味を蓄え、私の大好物です。動物みたいなものです。このようなものを大好物と思うのは私の育ちが大いに影響しています。戦後の開拓農村で育ったからです。見付けると腹八分目くらい食べます。図-33のとおりで、これが、元気の源になります。なお、食用きのこの群生に出会う事もあるが、それを採取はしません。

恵みに感謝して、同図を素材につたない短歌です。

“山ブドウアケビにクリの三拍子 山の恵みに感謝する”

“野イチゴとスグリ・桑あますの実甘酸味 食べてくれよとその実を捧ぐささ”

ところで、各地域の地元には、美味しい食べ物が沢山ありますが、私には、美食豪遊・グルメ贅沢の志向、「食」に関する関心・興味は特にありません。いわゆる「食の街道」にする事は無いので食の印象は何も残っておりません。(強食家ではありませんので。)



図-33

5. ビールの喉越しが至福の時

ビジネスホテルの多くは素泊まりである事から夕食と翌朝食の買い出しの殆どはコンビニ利用です。また日中は、昼食の時は、また、必要に応じコンビニに立ち寄ります。時々現地の食堂に立ち寄ります。その常連客とご主人・女将さんと私の3者がビールで盛り上がる事が何回もありました。歩いている時のビールの酔いは短時間のほろ酔いです。飲む量が少ない事もあるが、歩くと直ぐ様汗が噴き出るので長々とフラフラする事はありません。図-34のとおり。その時のビールから^{だま}騙された思いを短歌にして見ます。

“節目時^{どき}コンビニ探しビール飲む これが格別元気の泉”

“この力どこから来るか自問する 折に触れてのビールの冷味^{れいみ}”

“昼間から喉にビールを差し込んで 恍惚気分で宇宙を語る”

“歩きには特別権利を付与されて^{にちげつ} 日月問わずビールが飲める”

6. 思いを詩に畳み込み

歩いていると六根^{げん に び ぜつ しん い}（眼・耳・鼻・舌・身・意）が刺激されて様々な感情が横切りますが、その時々^{うた}の思いを「五七五七七」の言葉（文字）や七・五調等の詩にしています。あれこれと浮かんで来て楽しい一時となります。歩きながら浮かんで来た言葉をICボイスレコーダーに記録しています。そして、自宅に帰ってから整理しております。詩の文語文法を格別勉強した訳ではなく、また、花鳥風月の風流を、わびさびを詠えるような才能は無く、まったくの我流ですが、この本書の本文中に織り込んだものと、別途替え唄にしたものがあります。

“歴史道^{どう}を学び歩いてゴールする 湧来^{わきく}る芽出^{めで}はさらなる高み”

“ゴールして満足感もそこそこに 次へを目指しスタート発ちぬ^た”

“歴史路^{れきしみち}に今も昔も上下あり 文化^{ふみ}と情報^香乗せて行き交^かう”

“自慢げにあれだこれだと勝手言^いい 郷土^{いくさ}の魅力^をを投げ合い合戦”

“歩きつつ今と昔に橋を架け 頭^での中でレイヤー作業”



図-34

7. 歩いている時の爽快感

歩いていると、楽しくもあり悲喜交々の様々^{こもごも}な事柄^{かす}が脳裏を掠めて行きます。一方、身体^{こもごも}の足の一步を運ぶ道選びでは、計画の電子ルートと現地のルートは100%一致しない事が時々現出しますので、さらに

別の頭を使う事も多いのです。その電子ルートは、他人が作ったルートデータを買って来たものではないのです。前記のとおり、自分の価値観で仕上げた自己責任の道です。ですから、GPS 同オレゴン機を携行して、その中の計画ルートと現地を照合・確認しながら歩くが、世にいう「建前（計画）」と「本音（現実）」の差異・不整合・齟齬そごと重ね合わせて一喜一憂しながら歩きます。前記の同ルートに纏まつわる歴史と [大香ブランド老魂RouComサブタイトル] の作成過程も甦だいこうって来て、とても楽しくなります。一步一步、一日一日を繋いで行くと、時には足の炎症に悩まされる事はあるが、爽快感を感じるようになります。

また、景色に見惚みとれている中に単調感を覚えて来るが、そうすると「自分は何ものだ！」と、自己の有り様に向き合うようにもなります。現地でのルートの選定、宿の決め方、立ち寄り個所の選別、人との会話・交流時の言葉使い・心の持ち方など、様々な場面に遭遇する中で、思考・思案の分岐点に出くわします。緊張もします。不安よぎも過ります。自分のどの価値観を以って、どの尺度で、どのように切り抜けて行くのか、自分の柔軟性、危機対応能力が試される思いになります。そこを突破する、乗り越える事が出来た時には、達成感・充実感を味わえます。前述の「心・言・行」の全てが自己責任と表裏一体です。他人に寄り掛かる事は許されないのです。したがって、風邪薬・傷薬はもちろんの事、足の炎症ケアグッズなど身の回りの日常用品は持参します。良くある事だが通り掛った人から「車に乗れよ」と声を掛けられる事が時々ありますが、一切断っています。

1千メートル超の峠越えや登山そのものとなる急峻な上り下りの山道もありますが、日常生活に於いても元来何事も試練だと前向き、プラス志向（眼前の事象を自分の流儀で上書きして行く、カスタマイズして行く姿勢）で捉えるように努めており、一人の旅歩きでどんな事に遭遇しても、自力で解決して行きます。それがとても楽しくなります。孤独と孤立の満足感です。世の中には私が想像出来ない難儀と苦勞を抱えて挑戦・克服している人は数えきれない程沢山おり、私の苦勞などは取るに足らないちっぽけなものだと思っています。常々、自分には何事も「上には上がある」と言い聞かせています。

第九部 後行程（帰宅後）の楽しみ

私の人生修行道場ステージでの心言行の諸事万般の要点を文書化して記録しています。

1. 報告書の作成

一つの「歴史街道」スルーハイクが終了すると、記憶が薄れない内に自宅で記録としての報告書をパソコンに向かって作成します。

入手して来たパンフレットや宿の領収書、前記「第六部 必携『七つのデジタル武器（七つ道具）』」の記録、宿泊先でスマートフォンに入力しておいた電子メモ、ICレコーダーに入力したボイスメモと、頭脳の記憶とを合わせて、諸データ類を整理します。特筆すべき事項・出来事・体験談の要点を文書化して行きます。デジカメ写真は撮影月日毎に整理します。GPS オレゴン機に記録された電子ルートデータをダウンロードします。そして、歩行距離と時間、歩行速度等を数値化・数表化します。また、その時々^{うた}に詠ってメモしておいた短歌・詩も整理します。この「歴史街道スルーハイク遊学紀行一ステージ1」はまさに報告書そのものです。本書の他に日記帳的に日々の細々とした思い出や記録を文書にしています。

この中で、特に、GPS オレゴン機に記録された電子ルートデータを、前出「カシミール3D（無料・フリーソフト）」を起動し、「国土地理院の地形図（＝電子国土）」上に載せた時とても楽しくなります。足跡の全てが線になって克明に描かれますから、行き先、立ち寄り先が具体的な像となって甦って来ます。現地では、自分の立ち位置を地理的に認識していても、広範囲なエリアに於ける相対的な位置関係はイメージするものなかなか把握しきれないものがあります。しかし、この電子国土上の足跡ルートは、パソコン上では自由に拡大・縮小が可能なので、日本地図の中でどの場所を歩いたのか、相対位置関係が一目瞭然となります。歩き切った感激がさらに深まります。

2. 御礼状の送付

「歴史街道」トレイル終了後は、お世話になった全てのお宿と、休憩してお世話になった官民施設などに、上記報告書の要点をピックアップした概要報告書と共に御礼状を送付しています。その相手先の氏名と住所を間違いの無いように一つ一つ確かめながら、そして何よりもお世話になった状況と皆さんの顔を思い浮かべながら、その時々^{うた}の会話を思い出しながら書いております。

そうすると、後刻、多くの方から電話やお手紙で返答があります。本当にうれしい限りです。

例えば「旧東海道」スルーハイクでは、静岡県富士市吉原の「ビジネスホテル つるや」に泊まった時の事です。思いがけない事がありました。宿に着いた頃の16時前後は、部屋の窓から見た風景は、遠くには雲が湧いており何も見えない状況でした。ところが、18時過ぎに何気なしに見た部屋の窓から、本の少しだけの雲が掛った雄大な富士山がすっきりと見えたのであります。まったく想定外の事でびっくりしたやら、とても感動しました。

この事を御礼状に記述したら、後日、先方からお手紙がありました。その中には「窓からこの時期の富士山が見えた事、本当にラッキーでしたね。4月から9月ごろまで霞が掛かり、富士在住の私どもにもなかなか姿を見る事が出来ません。」というコメントが入っておりました。そして、先方のある従業員が屋上から撮影してくれた富士山の様々な表情の写真が同封されておりました。とても貴重な写真でした。